HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	第二部　部局史.　水産科学研究科・水産学部
Citation	北大百二十五年史, 通説編, 949-1000
Issue Date	2003-12-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/28187
Type	departmental bulletin paper
File Information	hokudai125yr_tsuusetsu_949.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

水産科学研究科・水産学部

第一章　水産科学研究科・水産学部

第一節　改組までの道のり――水産増殖学科・水産食品学科・水産化学科・漁業学科――

北海道大学水産学部は一九〇七（明治四〇）年二月、札幌農学校水産学科として札幌の地に誕生し、その後幾度かの制度の変革を経て一九九五（平成七）年四月、四学科一四講座と三附属施設をもつ現在の体制を整えた。その間の変革の概略は次のようである。

札幌農学校水産学科は一九〇七年九月、札幌農学校が東北帝国大学農科大学と改称されたのに伴い、同大学附属となった後、一九一八（大正七）年同大学が北海道帝国大学農科大学となったのに合わせて北海道帝国大学附属水産専門部と改称された。揺籃期の変遷はさらに一九三五（昭和一〇）年同専門部が廃止され、函館の地に移転して函館高等水産学校として開校してからも続いた。一九四四年同水産学校は函館水産専門学校と改められ、一九五一年三月まで存立した。この二年前、一九四九年新制大学制度の施行に伴い、北海道大学創設と時を同じくして、一九四〇年に札幌に設けられていた農学部水産学科と函館水産専門学校が合流して北海道大学水産学部が四学科体制で函館の地に誕生して、今日の学部の輪郭が定まった。

この北海道大学水産学部の四学科体制（漁業学科・遠洋漁業学科・水産増殖学科・水産製造学科）は、一九六四年から二年間、さらに改組拡充の努力が続けられ、水産製造学科が水産食品学科と水産化学科の二学科に分けられ、漁業学科と遠洋漁業学科が漁業学科の一学科に統合されて、同時に水産学部全学科に講座制が制定されるに至った。

キャンパス内に分散する木造校舎は一九七〇年鉄筋コンクリート六階の管理研究棟（一期分）と講義棟の新築落

成によってまとめられ、一九七六年頃にはほぼ今日の建物と環境が整備された。ここまでに至る先達の労苦と葛藤、費やされた莫大なエネルギーについては『北大百年史』部局史「水産学部」に詳述されている。

東北帝国大学農科大学水産学科から一九一〇年に第一期生四八名が卒業して以来、一九九五年三月の第八五期生まで一万二〇六〇名が巣立った。卒業生が漁業・水産食品加工・水産増養殖関連産業を基盤とする水産界、あるいは国内外の水産行政に多大な貢献をしてきたことは広く認められるところである。しかし、今日の海洋をめぐる国際情勢の変化や多様化する社会のニーズに的確に対応するため、水産教育の一層の充実が求められてきた。水産学の学問体系を含めた学科組織の再構築と新しい組織における適材適所の教官配置が不可避と判断されるに至って一九九五年大きな学科改組が押し進められた。これはあとで述べる二〇〇〇年の大学院重点化大学としての大学院改組とともに、水産学部の教育研究をこれからの社会情勢に調和させるためのめざましい改革で、そのため莫大なエネルギーが費やされた。

一九九五年四月、これまでの四学科一八講座と北洋水産研究施設の三部門を統合し、水産学の学問体系と教育研究体制の融合を図りながら、水産海洋科学科（三講座）・海洋生産システム学科（三講座）・海洋生物生産科学科（四講座）・海洋生物資源化学科（四講座）の合計四学科（一四講座）を新しい組織として新たな水産学部が出発した。長い間親しんだ学科と講座の名称はすべて斬新な新名称に改められ、改組に伴う組織運営の若干の混乱とともに滞りを生じたりもした。今後徐々に解消されていくであろうが、あとで述べるように教官の所属は大学院にあり、学科目制の学部との間で今後より緊密な連携が求められよう。

『北大百年史』の部局史に続く、最近二五年間を振り返って、旧学科と新学科の沿革を略述しながら水産学部におけるこの大きな学科改組を概観する。なお学科改組に続く大学院改組については稿を改めて述べる。

一　水産増殖学科

海洋・河川・湖沼の水産動植物の育種・増殖のほか、発生・生理・分類等の基礎的な面について十分な基礎理論と応用技術を修得させ、将来水産増養殖、水産資源保護の分野で指導的役割を果し得る人材を養成することを目的とする。一九九五年の学科改組に伴い当学科を構成する七講座のうち水産海洋科学科に移った浮游生物学講座を除く六講座は海洋生物生産科学科に移行した。

水産植物学講座　一九五三年に時田郁（教授、農博）、正置富太郎（助手、後に教授、水産博）、籔淵（助手、後に教授、水産博）の三教官で札幌から移転して発足した。一九八七年正置（教授）の停年退官に伴い、籔（教授）が講座を担当し、齋藤譲（助教授、後に教授、水産博）と当講座の兼務にあった臼尻水産実験所の山本弘敏（助手、後に教授、水産博）を迎え、安井肇（助手、後に助教授、水産博）が加わった。一九九二年籔の停年退官後、翌年水田浩之（助手、水産博）を迎え一九九四年に斉藤（教授）が停年退官した。海藻学関係は一講座だけなので、コンブなど有用海藻の養殖法の開発に限らず、海藻類の形態分類や発生、生理や生態、分布に関する研究など研究教育分野は多岐にわたった。一九九五年の学科改組に伴い育種培養学講座に移行した。

発生学・遺伝子講座　一九五三年に斎藤三郎（教授、農博）、新山英二郎（助教授、後に教授、理博）、濱田啓吉（助手、後に教授、農博）、山田壽郎（助手、後に助教授、農博）の四教官で札幌から移転した。一九六五年斎藤の停年退官後、新山が講座を担当し、一九六六年に山﨑文雄（助手、後に教授、水産博）が入った。山田は一九六八年に生理学・生態学講座へ転じ、小野里坦（助手、水産博）を加えた。一九七四年新山の停年退官に伴い濱田が講座を担当し、一九七七年に後藤晃（助手、後に助教授、水産博）が加わった。小野里が一九八三年に七飯養魚実習施設へ転任後、一九八五年に山羽悦郎（助手、水産博）を加えた。一九八六年濱田の停年退官後、山﨑が教授に昇格、一九八八年李大雄（助手）を加えた。魚類その他の水産動物の増殖および保護に関する基礎的研究を発生学、遺伝

学、組織学、生態学の分野から進めた。一九九五年の学科改組に伴い育種培養学講座に移行した。

生理学・生態学講座　一九五二年小林新二郎（教授、理博）、浜野繁（助教授、理博）、結城了伍（助手、農博）の三教官がそろった。一九七一年小林が停年退官したあと、一九六八年に発生学・遺伝学講座から迎えた山田壽郎（教授、農博）が講座を担当し、一九六六年に加わった麥谷泰雄（助手、後に教授、水産博）に一九七一年清水幹博（助手、後に助教授、水産博）を加えた。山田の停年退官後、一九九二年森司（助手、工博）を石川島播磨重工技術研究所から迎えた。放射性物質、電顕、遺伝子工学等の手法を用いて齢査定硬組織の形成機構、カルシウム代謝制御、浸透圧調節等の生理学分野の研究を進める一方、水族の生理・生態について教育を行った。一九九五年の学科改組により機能生物学講座に移行した。

淡水増殖学講座　渡辺宗重（教授）、久保達郎（講師、後に助教授、農博、後に七飯養魚実習施設に転ずる）で発足した。一九七五年山本喜一郎（教授、理博）の停年退官に伴い高橋裕哉（助教授、後に教授、理博）が講座を担当し、高野和則（助教授、水産博）に一九七六年山内晧平（助手、後に教授、水産博）が加わって講座運営に当たった。一九九〇年高野が琉球大学に転じ、翌年足立伸次（助手、後に講師、水産博）が基礎生物学研究所から加わった。一九九四年高橋の停年退官に伴い山内が講座を担当し、新たに三浦猛（助手、水産博）が加わった。種苗生産にかかわる魚類の雌雄性、生殖腺の発達機構および魚類の回遊機構に関する形態学的、内分泌生理学的研究を行い、有用水産生物の増養殖に関する学理を教育した。一九九五年の学科改組により機能生物学講座に移行した。

水産動物学講座　佐藤信一（教授）、五十嵐孝夫（講師、後に教授、水産博）、小林喜雄（助手、後に講師）で発足した。一九七四年岡田雋（教授、理博）の停年退官後、一九八三年講座を担当していた五十嵐（教授）の逝去に伴い、翌年、一九七一年下関水産大学校から迎えた尼岡邦夫（助手、後に教授、農博）が講座を担当し、一九七四年に加わった仲谷一宏（助手、後に助教授、水産博）に一九八四年矢部衛（助手、後に講師、水産博）を迎えた。水

産動物の分類・地理的分布、魚類の系統類縁関係、海産幼稚魚の形態・分類を研究し、水産動物学および魚類学を教育した。一九九五年の学科改組により生産基礎生物学講座に移った。

鹹水増殖学講座　田村正（教授、農博）と近江彦栄（助教授、後に教授、農博）で発足した。一九七七年近江が停年退官のあと、富士昭（助手、後に教授、水産博）が講座を担当し、一九六六年中尾繁（助手、後に教授、水産博）、一九八二年五嶋聖治（助手、後に助教授、理博）が加わった。一九九一年富士が停年退官後、同年野田隆史（助手、水産博）が加わった。浅海軟泥底および岩礁潮間帯のベントスの行動学的、生態学的研究から個体群動態や群集形成機構の解明を進め、有用種の増養殖に関する応用技術の開発にかかわる基礎的研究と教育を担当した。一九九五年の学科改組により生産基礎生物学講座に移行した。

浮游生物学講座　一九五一年元田茂（教授、農博）に川村輝良（助教授、後に教授、農博）と安楽正照（助手）が加わった。一九七七年川村が停年退官したあと、一九六〇年に加わった箕田嵩（助手、後に教授、水産博）が講座を担当した。一九七五年に志賀直信（助手、後に講師、水産博）が、また一九九一年に伴修平（助手、水産博）が加わった。海洋プランクトンの分類および生態、光合成、摂食、排泄等の生活史にかかわる基礎的研究と水産増養殖並びに漁業生産への応用的研究を進めた。一九九五年の学科改組に伴い、水産増殖学科の講座のなかから唯一水産海洋科学科へ移り、生物海洋講座を構成した。

二　水産食品学科

我が国の工業振興策に沿って、水産食品製造業も単なる漁獲物処理的なものから食品工業として脱皮を遂げるに至り、各方面から化学系出身者を要望する声が高まって来た。そこで、水産食品に特に関連の深い次の五講座と実習工場から成る新学科が発足した。一九九五年の学科改組に伴い、五講座のうち水産海洋科学科に移った微生物学

講座を除く四講座は海洋生物資源化学科に移行した。

食品化学第一講座　一九五三年に五十嵐久尚（教授、農博）、座間宏一（講師、後に教授、農博）、細谷勇治（助手）の三教官で札幌キャンパスから移転した。細谷とその後に加えた助手の転出にともない、羽田野六男（助手、後に教授、農博）と高間浩藏（助手、農博）を迎えた。一九七五年に五十嵐は停年退官したので、座間が教授となり、羽田野も昇任した。一九七九年に高橋是太郎（助手、後に教授、水産博）を加えた。一九八二年に高間は水産食品製造実習工場の助教授に転じたため、翌年に安藤清一（助手、水産博）を加えた。一九八六年に座間は停年退官し、羽田野が後任となり、高橋も昇任した。一九八七年に川合祐史（助手）を加えたが、一九八九年に食品製造学講座に転じた。さらに翌年、安藤が鹿児島大学へ転出したので、一九九一年に栗原秀幸（助手）を迎え、その翌年に細川雅史（助手）を加えた。広範な水産生物の脂質、及び脂質とタンパク質との相互作用、水産リン脂質と赤血球膜の性状との関連、海藻の酵素阻害物質等について研究が行われた。

食品化学第二講座　村田喜一（教授、農・医博）、高木光造（助教授、後に教授、農博）大石圭一（助手、後に教授、農・医博）の三教官で発足した。その後に飯田優（後に助教授、水産博）、岡重美（獣医博）を助手に加え、村田が停年退官した。高木は一九七六年から八五年の停年まで、次いで大石が一九八五年から八七年の停年まで教授を務め、大石の後任として水産食品製造実習工場より高間浩藏（教授、農博）を迎えた。同年に飯田が急逝したため、翌年に鈴木鐵也（助教授、農博）を迎えた。一九八七年に鈴木聡（助手、薬博）を加えたが、五年後に高知大学に転出した。水産物の呈味成分、海藻のエキス成分の化学及び魚貝類による食中毒原因菌の究明、魚類寄生虫の感染、水産脂質及びその生体機能等の研究が行われた。

生物化学講座　吉村克二（教授、農博）、久保周一郎（講師、後に助教授、理博）、柴田猛（講師、後に教授、農博）の三教官で発足した。久保の転出、牛山寛（助手）の加入と急逝、吉村の停年退官、斎藤恒行（教授、理博）、新

井健一（助手、後に教授、水産博）、関伸夫（助手、後に教授、水産博）の加入と斎藤の停年退官などを経た後、一九七七年に今野久仁彦（助手、後に助教授、水産博）を加えた。一九八一年に柴田は教授に昇任し一九八七年に停年になり、新井が後任に昇任した。一九八九年に埜澤尚範（助手、農博）を迎えた。新井は一九九二年に停年退官し、関が後任となった。スルメイカのタンパク質、魚類筋肉の解糖系酵素、魚類筋肉の収縮及び調節タンパク質などの研究が行われた。

微生物学講座　武田志麻之輔（教授、農博）、長尾清（講師、後に助教授）、木村喬久（助手、後に教授、水産博）で発足した。武田は長崎大学へ転出、長尾は急逝し、坂井稔（助教授、後に教授、農博）、信濃晴雄（助手、農博）、繪面良男（助手、後に教授、水産博）を加えたが、信濃は食品製造学講座へ転じたので、田島研一（助手、後に助教授、水産博）を、また一九八〇年に吉水守（助手、水産博）を加えた。一九九一年に木村が停年退官し、繪面が教授に昇任し、翌年に澤辺智雄（助手、水産博）を加えた。吉水は一九九三年に水産植物学講座の講師に転じた。水産食品に関係する細菌及び海洋細菌の分類、生態学的研究、活魚や魚卵、海藻類の病害対策の研究など幅広い研究が行われた。一九九五年の学部改組に伴い、吉水は海洋生物資源化学科へ、また他の三教官は水産海洋科学科へ移行した。

食品製造学講座　谷川英一（教授、農・理博）、井上安之助（助教授）、秋場稔（講師、後に教授、農博）、元広輝重（助手、農博）の四教官で発足した。その後、木村昇（助手）が加入したが、谷川の転出により秋場が教授に昇任した。さらに元広が水産食品製造実習工場に転じ、信濃晴雄（助教授、後に教授、農博）を微生物学講座から迎え、猪上徳雄（助手、後に教授、水産博）を加えた。一九八四年に秋場は急逝したので、信濃が後任となり、一九八九年に川合祐史（助手、後に講師、水産博）を迎えた。一九九一年に木村は民間会社に転出したので、一九九三年に山﨑浩司（助手、水産博）を加えた。北洋のサケ、マス、カニ、及び多獲性魚類の缶詰、冷凍、薫製、ねり製

品製造加工技術の開発や改良に取り組んだ。

水産食品製造実習工場　井上安之助（助教授）が主任となり一九五〇年に発足した。井上の停年退官に伴い、元広輝重（助教授、農博）を後任に迎えた。一九八一年沼倉忠弘（助手、後に助教授、水産博）を加えたが、翌年に元広は鹿児島大学に転出した。そこで後任に高間浩藏（助教授、農博）を迎えたが、一九八七年に食品化学第二講座に転じたので、沼倉を後任とした。一九九三年の沼倉の停年退官に伴い、佐伯宏樹（助教授、水産博）を後任として迎えた。学部学生の実習指導のほか、食品製造技術の改良、食品工場排水の処理法や環境汚染防止策の研究も行われた。

三　水産化学科

理工系出身者の必要増に応じて、旧水産製造学科にあった化学系三講座と新設の分析化学と化学工学の二講座を加えて、一九六四年に五講座から成る水産化学科を発足させ、水産化学工業の担い手としての人材の養成に努力が傾注された。一九九五年の学科再編成により発展的解消を遂げた。

水産高分子化学講座　一九五三年に斎藤恒行（教授、理博）、石原義雄（助教授、後に教授、農博）、辻野勇（助手、後に教授、農博）、横山彰（助手）の四教官で札幌キャンパスから移転した。その後、横山が転出、新井健一（助手、水産博）を加えたが、斎藤と新井は生物化学講座に転じたので、石原が教授となり西田清義（助手、後に教授、水産博）、米田勤（助手）を加えた。一九七八年に石原が停年退官し、翌年辻野が教授となった。一九八二年に米田は病気退職、翌年に尾島孝男（助手、後に助教授、水産博）を加えた。さらに一九八五年に小島直也（助手、理博）を迎えた。翌年に辻野は停年退官し、西田が後任となり一九八九年横本敬紀（助手）を加えた。一九九〇年に小島は退職し、一九九二年に横本が外資系科学機器会社に転出したので、後任に田中啓之（助手）を加えた。また

後述の分析化学講座の解消にともない、一九九五年に分析化学実験担当のために小達恒夫（助手、水産博）が迎えられたが、間もなく水産海洋科学科に配置換となった。海産無脊椎動物、魚類、鯨類と広範な水産動物の筋肉タンパク質、酵素、ホルモン、さらには海藻の多糖類や特異成分などの化学的検索、単離、性質の研究などが行われた。

魚油化学講座　山田実（助教授、後に教授、農博）と近藤尚（講師）で発足した。その後、太田亨（助手、後に教授、水産博）、林賢治（助手、水産博）を加えた。山田は一九七〇年に教授に昇任、一九七五年に停年退官したので、後任に高木徹（教授、工博）を迎えた。翌年、近藤は後述の水産化学実習工場の主任に転じた。一九八一年に板橋豊（助手、後に助教授、水産博）を加え、一年後に林は水産化学実習工場に転じ、さらに二年後に宮下和夫（助手、農博）を迎えた。一九九一年に板橋が助教授となり、翌年に高木は停年退官したので太田が後任となり、一九九四年に安藤靖浩（助手、水産博）を加えた。魚類脂質の生化学的研究、最近は脂質成分の機器分析法の開発、天然坑酸化剤の検索、脂質の立体特異性と反応性などの研究を行った。

海洋化学講座　鈴木昇（教授、農博）、加藤健司（助教授、理博）、小黒美樹（助手）で発足した海藻化学講座が前身である。その後、三人は順次転出したので、教授に川原鳳策（理博）、助教授に石井次郎（理博）、助手に米田義昭（水産博）を迎えた。さらに伊達崇秀（助手）を加えたが民間に転出し、中島剛（助手）を迎えた。石井は東海大学へ転出したので、原田武夫（助教授、理博）を迎えた。川原は停年となり、中島は信州大学へ配置換になったので、一九七三年に分析化学講座から助手に松永勝彦（後に教授、理博）、一九七六年に教授に深瀬茂（農博）を迎え、一九八四年に停年退官した。この間、一九八〇年に米田は北洋水産研究施設へ転じ、一九八三年簗田滿（助手、後に講師、水産博）を加え、翌年に松永が助教授に昇任した。二年後に原田も停年退官し、さらに翌年には簗田が北洋水産研究施設へ転じたので、一九八七年工藤勲（助手、水産博）を、翌年に久万健志（助手、水産博）を加えた。一九八九年に樫木勇（助教授、水産博）を化学工学講座から迎えた。海水中の無機、有機成分や海底堆積

物の化学、最近では海藻繁茂に必要な化学成分の研究、磯焼けの原因についての研究などが行われた。一九九五年の学科改組に伴い、水産海洋科学科に移行した。

分析化学講座　一九六五年に西村雅吉（教授、理博）、中谷周（助手、水産博）で発足した新設講座である。その後に角皆静男（講師、後に教授、理博）と松永勝彦（助手、理博）を加えたが、松永は海洋化学講座に転じた。一九七六年に乗木新一郎（助手、後に助教授、水産博）を迎えたが、中谷は一九七八年に弘前大学に配置換になった。一九八一年に西村は停年退官し、角皆が後任となり乗木が昇任した。同年に原田晃（助手、水産博）を、翌年に渡邉修一（助手、理博）を加えたが、原田が一九九一年に工業技術院に転出したので、二年後に成田尚史（助手、水産博）を加えた。本講座は一九九四年に本学大学院地球環境科学研究科に移行し、水産化学科から解消された。海水や大気の微量成分の分析法、セジメント・トラップ法を開発して物質の陸地・海洋・大気間の循環、人類活動に伴う地球環境変化などの研究が行われた。

化学工学講座　一九六六年の新設で、教授に三木正之（工博）が着任、酒井信（助手、後に助教授、水産博）、樫木勇（助手、水産博）、鈴木翼（講師、後に教授、工博）を順次加えた。一九七九年に三木は停年退官し、後任に後藤圭司（教授、工博）を迎えたが、二年後に豊橋技術科学大学に配置換となり、後任に鈴木が昇任した。一九八五年に関秀司（助手、水産博）を加えたが、樫木が一九八九年に海洋化学講座に転じたので、一九九一年に丸山英男（助手）を加えた。水産工場排水処理法、同排水中のタンパク質コロイド粒子の除去法、高分子凝集剤の開発についての研究、成分解性プラスチックの開発研究等が行われた。

水産化学実習工場　一九七六年に近藤尚（講師、後に助教授）を主任として迎えたが、翌年に急逝した。実習は化学科教官で継続したが、一九八三年に林賢治（助教授、水産博）を後任として迎え、さらに一九八八年に岸村栄毅（助手）を加えた。水産化学科学生の工場実習を指導する傍ら、水産動物の脂質の研究や、最近では脂質分解酵素

の研究も行った。

四　漁業学科

旧漁業学科と遠洋漁業学科の二つの学科が一九六六年に改組されて漁業学科となり、漁場学専攻の四講座と漁業工学専攻の七講座で学科を構成した。そして一九七二年に講座制への移行を完了し、学部学生並びに大学院生の教育と研究を担当した。将来船舶職員を志望する本学科の学生は、特設専攻科に進み海技免状取得に必要な単位の履修が可能である（一九九八年廃止）。本学科に所属する各講座の教育と研究の内容は次のとおりである。

（一）漁場学専攻

漁場学講座　齋藤市郎（教授、農博）と上野元一（講師、後に教授、水産博）で発足した遠洋漁業学教室が前身である。一九八五年上野の停年退官後、前田辰昭（助手、後に教授、水産博）が講座を担当し、一九七四年に加わった高橋豊美（助手、後に教授、水産博）に一九八六年中谷敏邦（助手、後に助教授、水産博）を加えた。一九九二年前田の停年退官後、高橋、中谷に同年髙津哲也（助手、水産博）が加わった。漁業対象生物の再生産機構、分布、回遊、捕食関係等の生態学的研究と漁場形成機構や漁況予測等、漁業の合理化を目標として教育と研究を担当し、主に沿岸の資源管理に関する研究を行った。一九九五年の学科改組により海洋生物生産科学科の資源生態学講座に移った。

海洋学・気象学講座　小藤英登（助教授、理博）に山口生知（教授、理博）と秋葉芳雄（助手・後に助教授）を加えて一九五七年に体制を整えた。一九七二年竹内能忠（教授、理博）の停年退官後、秋葉、大谷清隆（助手、後に教授、理博）に、一九七五年村上敬（助手）を加えて構成されたが、一九九四年秋葉が停年退官、大谷、村上に同年愛媛大学から磯田豊（助教授、理博）を迎えた。海洋環境を物理学的立場からとらえ、教育と研究に当たった。

海洋気象学の教育を担当し、主に北太平洋や日本海の海洋物理学的研究を行った。一九九五年の学科改組により、水産海洋科学科の物理海洋学講座に移った。

資源生物学講座　旧漁業学科太田憲一（助教授）に一九五三年久新健一郎（助手、後に教授、農博）、一九五五年木下哲一郎（助手、後に助教授、水産博）、一九五八年浜井生三（教授、理博）を迎えた。一九七四年浜井の停年退官後、久新と木下に、一九七五年北海道網走水産試験場から菅野泰次（助手、後に教授、水産博）を迎えた。一九九〇年久新、一九九四年木下が停年退官後、一九九三年松石隆（助手、農博）を加え、一九九四年西村欣也（助教授、農博）を筑波大学から迎えた。資源生物学の基礎となる個体群生態の諸問題について教育と研究を担当し、主に魚類個体群の数量動態及び個体群の生物学的特性に関する研究を行った。一九九五年の学科改組により、海洋生物生産科学科の資源生態学講座に移った。

漁業航海学講座　旧遠洋漁業学科の航海学教室が前身で日向政明（助教授、後に教授）と平岩節（講師、後に教授、水産博）で発足した。一九七五年日向が停年退官後、平岩と坂本有隣（助手、後に助教授）に練習船北星丸から米田國三郎（助手、後に助教授、水産博）を加えた。一九八七年平岩、一九九二年坂本の退官後、大西広二（助手）が加わり、翌年齊藤誠一（助教授、水産博）を日本気象協会から迎えた。洋上における位置測定や航路の選定について教育と研究を担当し、主に位置測定の最適化及び風波による漂流、偏流、減速等に関する研究を行った。一九九五年学科改組により、水産海洋科学科の物理海洋学講座に移った。

（二）漁業工学専攻

漁具漁法学講座　旧漁業学科内に川崎毅（教授）、山口豊吉（助手）、西山作蔵（助手、後に教授、水産博）、中村秀男（助手、後に助教授）で発足した漁業学教室が前身である。一九七一年金森政治（教授、理博）の停年退官後、西山と中村に同年三浦汀介（助手、後に教授、水産博）を加えて講座を構成し、一九八二年中村の逝去に伴い水産

庁水産工学研究所から笹川康雄（助教授、水産博）を迎えた。一九八九年西山の停年退官後、一九九〇年に清水晋（助手、後に講師、水産博）、一九九四年笹川の停年退官後、藤森康澄（助手、水産博）を加えた。漁業生産システムの機構と操作に関する教育と研究を担当し、主に現用の漁具漁法に関する改良と漁具に対する魚群行動について研究を行った。一九九五年の学科改組後、海洋生産システム学科の生産システム設計学講座に移った。

漁具設計学講座　旧漁業学科の漁具物理学教室として、三浦鉄雄（助教授）の一人体制で発足、一九五三年に佐藤修（講師、後に教授、理博）を迎えた。一九八九年佐藤の停年退官後、梨本勝昭（助手、後に教授、水産博）と山本勝太郎（助手、後に助教授、水産博）に、一九九〇年平石智徳（助手、後に講師、水産博）を加えた。漁具理論を確立し漁具設計の基礎及び実用について教育と研究を担当し、主に漁具や増養殖施設の時空間的動態の解析及び生態に整合する漁具や施設の設計・改良等の研究を行った。一九九五年の学科改組により、海洋生産システム学科の生産工学講座に移った。

漁業機械学講座　旧漁業学科の水産機械学教室が前身で、小林喜一郎（教授、水産博）と高橋広弥（講師、後に漁船工学講座に転じた）で発足した。一九七七年小林の停年退官後、五十嵐脩蔵（助手、後に教授、水産博）と見上隆克（助手、後に講師、水産博）に、一九八三年山下成冶（助手、水産博）を加えた。一九九四年五十嵐の停年退官後、橋本忍（教授、工博）を大分県工業技術院研究交流センターから迎えた。漁業の諸作業の過程や成果を能率的、合理的、効果的に高める機械的手段・手法について教育と研究を担当し、主に漁業生産の省力化、機械化及び漁業機械の安全設計に関する研究を行った。一九九五年の学科改組により、海洋生産システム学科の生産システム設計学講座に移った。

漁業測器学講座　旧遠洋漁業学科の航海計器学教室が前身で、井内三次（教授）、新宅清（助教授）で発足した。一九七八年石田正巳（教授、工博）の停年退官後、鈴木恒由（講師、後に教授、農博）と佐野典達（助手、後に教

授、水産博）に、一九八一年飯田浩二（助手、後に助教授、水産博）を加えた。一九八八年鈴木の停年退官後、佐野と飯田に同年向井徹（助手、水産博）を加えた。一九九四年佐野は停年退官した。漁業における諸現象を定量的に把握するための計測学の教育と研究を担当し、主に各種漁業計測並びに水中音響及び魚探技術に関する研究を行った。一九九五年の学科改組後は、海洋生産システム学科の生産システム設計学講座に移った。

漁船工学講座　旧遠洋漁業学科の漁船工学教室が前身で、北林邦之助（教授）と石田正巳（助教授、後に漁業測器学講座に転じた）で発足した。一九八二年烏野慶一（助教授、後に教授、工博）を神戸商船大学から迎えた。一九八五年高橋広弥（助教授）の停年退官後、烏野が講座を担当した。一九七四年に迎えた浅野一彦（助手、後に講師）は一九九〇年三井造船に転じた。一九八六年蛇沼俊二（助手、後に助教授、水産博）が、また一九九三年に前川和義（助手）が加わった。船舶理論、舶用機関について教育と研究を担当し、主に漁船や漁具及び海洋構造物の設計並びに船体の流体力学や運動・制御に関する研究を行った。一九九五年の学科改組により、海洋生産システム学科の生産工学講座に移った。

漁船運用学講座　旧遠洋漁業学科の船舶運用学教室が前身で、八反田吉常（教授）が担当していた。一九八五年川島利兵衛（教授、工博）の停年退官後、稲葉恭人（教授、水産博）と天下井清（助手、後に教授、水産博）に翌年木村暢夫（助手、後に助教授、水産博）を加えた。一九九一年稲葉の停年退官後、天下井と木村に翌年甫喜本司（助手）が加わった。操船及び運航・整備に関する基礎学並びに漁船の操業時における安全運航と能率化について教育と研究を担当した。主に漁船の耐航性や漁業生産における人と船との安全確保、海難防止に関する研究を行った。一九九五年学科改組後は、海洋生産システム学科の生産管理学講座に移った。

水産経営学講座　旧漁業学科の水産経営学教室が前身で、一九五〇年村岡夏雄（講師、後に助教授）の着任で発足した。一九六八年新川伝助（教授、経博）の停年退官後、村岡と鈴木旭（助手、後に教授、農博）に増田洋（助手、

表１　学部改組前、1994年度の学科・講座・教官の配置

水産増殖学科	
講　座	教官名
水産植物学	教　授　山本　弘敏
	助教授　安井　肇
	助　手　水田　浩之
発生学・遺伝学	教　授　山崎　文雄
	助教授　後藤　晃
	助　手　山羽　悦郎
	助　手　李　大雄
水産動物学	教　授　尼岡　邦夫
	助教授　仲谷　一宏
	講　師　矢部　衛
生理学・生態学	教　授　麥谷　榮雄
	助教授　清水　幹博
	助　手　森　司
浮遊生物学	教　授　箕田　嵩
	講　師　志賀　直信
	助　手　伴　修平
淡水増殖学	教　授　山内　晧平
	講　師　足立　伸次
	助　手　三浦　猛
鹹水増殖学	教　授　中尾　繁
	助教授　五嶋　聖治
	助　手　野田　隆史

水産食品学科	
講　座	教官名
食品化学第一	教　授　羽田野六男
	助教授　高橋是太郎
	助　手　栗原　秀幸
食品化学第二	教　授　高間　浩藏
	助教授　鈴木　鐵也
	助　手　岡　重美
生物化学	教　授　関　伸夫
	助教授　今野久仁彦
	助　手　埜澤　尚範
微生物学	教　授　緒面　良男
	助教授　田島　研一
	助　手　澤辺　智雄
食品製造学	教　授　信濃　晴雄
	教　授　猪上　徳雄
	講　師　川合　祐史
	助　手　山崎　浩司
水産食品製造実習工場	助教授　佐伯　宏樹

水産化学科	
講　座	教官名
水産高分子化学	教　授　西田　清義
	助教授　尾島　孝男
	助　手　田中　啓之
魚油化学	教　授　太田　亨
	助教授　板橋　豊
	助　手　宮下　和夫
	助　手　安藤　靖浩
海洋化学	教　授　松永　勝彦
	助教授　樫木　勇
	助　手　久万　健志
	助　手　工藤　勲
化学工学	教　授　鈴木　翼
	助教授　酒井　信
	助　手　関　秀司
	助　手　丸山　英男
分析化学教室	教　授　角皆　静男
	教　授　乗木新一郎
	助　手　渡邉　修一
	助　手　成田　尚史
水産化学実習工場	助教授　林　賢治
	助　手　岸村　栄毅

漁業学科	
講　座	教官名
（漁場学）	
漁場学	教　授　高橋　豊美
	助教授　中谷　敏邦
	助　手　高津　哲也
海洋学・気象学	教　授　大谷　清隆
	助教授　磯田　豊
	助　手　村上　敬
資源生物学	教　授　菅野　泰次
	助教授　西村　欣也
	助　手　松石　隆
漁業航海学	教授(兼)大谷　清隆
	助教授　米田國三郎
	助教授　齊藤　誠一
	助　手　大西　広二
（漁業工学）	
漁具漁法学	教　授　三浦　汀介
	講　師　清水　晋
	助　手　藤森　康澄
漁具設計学	教　授　梨本　勝昭
	助教授　山本勝太郎
	講　師　平石　智徳
漁具機械学	教　授　橋本　忍
	講　師　見上　隆克
	助　手　山下　成治
漁場測器学	教授(兼)梨本　勝昭
	助教授　飯田　浩二
	助　手　向井　徹
漁船工学	教　授　烏野　慶一
	講　師　蛇沼　俊二
	助　手　前川　和義
漁船運用学	教　授　天下井　清
	助教授　木村　暢夫
	助　手　甫喜本　司
水産経営学	教　授　増田　洋
	講　師　古林　英一
	助　手　板倉　信明

北洋水産研究施設	
部　門	教官名
海洋生態学部門	教　授　島崎　健二
	助教授　小城　春雄
	助　手　桜井　泰憲
海洋環境学部門	教　授　梶原　昌弘
	助教授　三宅　秀男
海洋生産学部門	教　授　米田　義昭
	助教授　簗田　滿

附属三施設	
施　設	教官名
臼尻水産実験所	助　手　宗原　弘幸
洞爺湖臨湖実験所	助教授　上田　宏
七飯養魚実習施設	助教授　原　彰彦

練習船・研究調査船	
施　設	教官名
おしょろ丸	教　授　安間　元
	講　師　佐々木成二
	講　師　梶原　善之
	助　手　髙木　省吾
	助　手　小林　直人
	助　手　三品　恒美
北星丸	助教授　目黒　敏美
	助教授　山口　秀一
	助　手　亀井　佳彦
	助　手　坂岡桂一郎
うしお丸	助　手　大越　金蔵
練習船研究室	助教授　小林　源司
	講　師　石井　清彦

後に教授、農博）を加えた。一九八二年村岡の停年退官後、鈴木が講座を担当、一九八九年板倉信明（助手、水産博）を加えた。一九九二年鈴木の停年退官後、増田と板倉に一九九三年古林英一（講師、農博）を九州大学から迎えた。一九九四年に増田は逝去した。水産業を経済学・経営学の立場から教育と研究を担当し、主に日本漁業の経済構造と漁業企業の経営分析及び漁業管理に関する経営を経済学的側面から研究した。一九九五年学科改組により、海洋生産システム学科の生産管理学講座に移った。

第二節　学部改組――一九九五年新しい四学科体制へ――
海洋生物生産科学科・海洋生物資源化学科・海洋生産システム学科・水産海洋科学科

一　海洋生物生産科学科

一九九五年四月から学科改組による新しい四学科体制となり、そのうちの一学科として発足した。本学科は水圏動植物の個体から群集にいたるまでの一貫した生物事象およびその基礎理論を教授する。さらに基礎生物学的理論を水産科学へ応用するために必要な生体機能学的教育および資源生態学的教育に重点を置くことにより、水圏生物資源の培養と管理・保全に関する技術的基礎とその開発能力を備える人材を育成することを目的とする。あわせて大学院教育への方向性とその基礎学力の充実を図る。本学科は四講座から成っており、主な内容は次のとおりである。なお、本学科は育種培養学と機能生物学が含まれる機能系コースと生産基礎生物学と資源生態学が含まれる生態系コースの二つのコースに分かれている。

育種培養学講座　水産増殖学科の水産植物学講座と発生学・遺伝学講座が統合され、水圏動植物の遺伝資源に関する開発、新品種の作出およびその育成を図るための基礎となる水産植物学・藻類増殖学・動物発生学・育種遺伝学

に関わる研究と教育を行なった。一九九九年山崎文雄（教授）の退官に伴い広島大学から迎えた荒井克俊（教授、水産博）と山本弘敏（教授）、後藤晃（助教授）と安井肇（助教授）、李大雄（助手）と水田浩之（助手）で構成した。

機能生物学講座　水産増殖学科の生理学・生態学講座と淡水増殖学講座が統合されて当講座を構成した。水圏動物の生理機能に関する基礎知識を与え、生理的諸現象を分子レベルで理解させるとともに、増養殖への応用と技術基礎を教育した。麥谷榮雄（教授）、山内晧平（教授）、七飯養魚実習施設から異動した原彰彦（教授、水産博）、清水幹博（助教授）、足立伸次（講師、後に助教授）、矢部衛（助教授、後に生産基礎生物学講座へ転ずる）、森司（助手）で構成した。

生産基礎生物学講座　水産増殖学科の水産動物学講座と鹹水増殖学講座が統合され、水圏の生物生産に関わる動物分類学、個体群あるいは動物群集の構造と機能を理解するために、水圏動物の体制、機能、分類、生態、分布などについて形態学、生態学および系統分類学の立場から研究教育を行なった。教官は尼岡邦夫（教授、二〇〇〇年停年退官）、中尾繁（教授）、仲谷一宏（助教授）、機能生物学講座から移った矢部衛（助教授）、五嶋聖治（助教授）、三浦猛（助手）、野田隆史（助手）で構成した。

資源生態学講座　漁業学科漁場学コースの漁場学講座と資源生物学講座および北洋水産研究施設の海洋生態学部門が統合されて当講座を構成した。高次栄養段階に位置する魚類・海洋哺乳類などの種個体群の生活史、再生産機構、数量変動機構および群集の構造と機能を体系的に教授し、これら生態学的基礎および理論をもとに水産資源の保全と有効利用に関する研究教育を行なった。北洋水産研究施設から転じた島崎健二（教授、一九九九年停年退官）、菅野泰次（教授）、高橋豊美（教授）、西村欣也（助教授）、中谷敏邦（助教授）、北洋水産研究施設から転じた桜井泰憲（助教授）、松石隆（助手）、高津哲也（助手）の八教官で構成した。

二　海洋生物資源化学科

一九九五年四月に学部改組が行われ、新しい四学科体制に移行した。水産食品学科の微生物学講座（三教官）と水産化学科の海洋化学講座を除く、両学科の講座と水産化学実習工場により新しい学科を編成し、海洋生物資源の総合的有効利用のための理論と応用のための教育と研究を行っている。本学科は食品科学系とマリンバイオテクノロジー系の二コースに分かれている。本学科は二〇〇〇年四月の大学院重点化による改組に伴い、大学院水産科学研究科生命資源科学専攻に移行した。

生物機能化学講座　太田亨（教授）、西田清義（教授）、板橋豊（助教授、後に教授）、尾島孝男（助教授）、安藤靖浩（助手、後に助教授）、田中啓之（助手）で発足した。一九九九年に太田が退官し、板橋が教授、安藤が助教授となった。マリンバイオテクノロジー系の講座で、海洋生物の生命現象とそれに関連するタンパク質、酵素、脂質、核酸など各種生体成分の生化学的性質、化学的性質及び生物機能の教育と研究を行った。

生物化学工学講座　鈴木翼（教授）、猪上徳雄（教授）、林賢治（教授）、吉水守（助教授、後に教授）、酒井信（助教授）、宮下和夫（助教授）、関秀司（助手）、丸山英男（助手）、岸村栄毅（助手）で発足した。一九九七年に猪上は食品機能化学講座に転じ、吉水が教授となった。翌年に山崎浩司（助教授）を食品機能化学講座より迎えた。マリンバイオテクノロジー系の講座で、微生物機能、酵素・化学反応を用いた海洋・水産資源の有効利用に関する教育と研究を行った。

食品生化学講座　羽田野六男（教授）、関伸夫（教授）、高橋是太郎（助教授、後に教授）、今野久仁彦（助教授）、栗原秀幸（助手、後に助教授）、埜澤尚範（助手）、細川雅史（助手）で発足した。一九九六年の羽田野の停年退官に伴い、高橋が教授に昇任、栗原が翌年昇任した。食品科学系コースの講座で魚介類の成分分析、水産脂質の機能開発、酵素阻害物質の検索、タンパク質・酵素の構造・機能と応用、食品の品質評価等に関する教育と研究を行っ

た。

食品機能化学講座　信濃晴雄（教授）、高間浩藏（教授）、鈴木鐵也（教授）、佐伯宏樹（助教授）、川合祐史（講師、後に助教授）、岡重美（助手）、山﨑浩司（助手）で発足した。一九九六年に川合が助教授になり、信濃が翌年停年退官したので後任に生物化学工学講座の猪上が転じた。また、その翌年に山﨑が生物化学工学講座に転じた。食品科学系コースの講座で、水産食品素材の栄養・健康性機能・安全性、食品設計、ならびに微生物代謝機能の利用等に関する教育と研究を行った。

三　海洋生産システム学科

本学科は、一九九五年の学科改組により漁業学科の漁業工学専攻の七講座によって構築され、海洋における生物資源を総合的、持続的に利用することを目指し、生産システムに係る理工学的テクノロジーに関する分野、生産から流通までの一連の過程を考慮したシステム設計に関する分野、社会科学的側面に立脚した生産管理に関連する分野で構成し、特設専攻科（一九九八年廃止）への進学も可能にしている。本学科の三講座は以下のとおりである。

生産工学講座　烏野慶一（教授）、梨本勝昭（教授）、山本勝太郎（教授）、蛇沼俊二（講師、後に助教授）、平石智徳（講師、後に助教授）、見上隆克（講師、後に助教授）、前川和義（助手）で発足した。生産手段である増養殖施設と成育環境を効果的に高める漁場の造成、保全に関わる水産土木及び漁船、漁具などの最適設計に関して教育した。移動浮体に働く流体力のモデル化とその運動制御に関する研究、漁具の選択性と性能、漁場造成に関する研究、漁業用資材の材料力学的研究、流体中の漁具の形状と運動に関する研究を進めた。

生産システム設計学講座　橋本忍（教授）、三浦汀介（教授）、飯田浩二（助教授、後に教授）、山下成治（講師、後に助教授）、清水晋（講師、後に助教授）、向井徹（助教授）、藤森康澄（助手）で発足した。持続的、計画的生

産を目的に、システム工学、計測学、情報学などの手法を適用して、水産資源・生産手段における生産システムの設計と制御に関して教育した。人間・機械システムの設計・制御、信頼性と安全性に関する研究、資源評価のための定量採集具に関する研究、海洋水産資源の音響調査手法の開発に関する研究を進めた。

生産管理学講座　天下井清（教授）、増田洋（教授）の逝去に伴い東京水産大学から一九九五年に迎えた廣吉勝治（教授、農博）、木村暢夫（助教授）、古林英一（助教授）、甫喜本司（助手）、板倉信明（助手）で発足した。二〇〇〇年、古林は北海学園大学に転じた。海洋利用に関する国際関係及び水産物市場の国際的動態の特性と持続的生産のための経営管理・マーケティング、漁業生産過程における人及び漁船の安全を管理要素とした漁業生産管理に関して教育した。漁船の転覆、衝突、漁業者の海中転落、操業中の人身事故等の海難防止に関する研究、漁業生産機構及び水産物市場・流通、沿岸漁業及び水産養殖業の経営問題に関する研究を進めた。

四　水産海洋科学科

一九九五年の学科改組に伴い新しく設置された本学科は、海洋を一つの生態系と考え、物理学、化学と生物学を基礎にして総合的に海洋の環境と生物生産について教育と研究を行う。将来、海洋環境のモニタリングやアセスメントなどを通し、海洋を総合的に理解し、その実態把握や変動予測の出来る人材を育成することを目指している。三年次から物理、化学、生物を主にした講座に分かれ、それぞれ専門教育を受ける。本学科には三つの講座があり、各講座の内容は次のとおりである。

物理海洋学講座　漁業学科漁場学コースの海洋学・気象学講座、漁業航海学講座、北洋水産研究施設海洋環境学部門が統合されて当講座を構成する。一九九七年東京大学から迎えた岸道郎（教授、農博）、北洋水産研究施設から転じた三宅秀男（助教授、後に教授）、齊藤誠一（助教授、後に教授）、磯田豊（助教授）、米田國三郎（助教授）、

村上敬（助手）、大西広二（助手）で構成した。水産の基礎としての海洋の生物生産やその環境を支配している海水の特性や運動に関する物理的理論を基礎に生物生産に関わる物理過程と海洋環境の計測法について研究する。具体的には、海洋の位置測定、海流や沿岸勇昇、海洋前線、波動、漁海況変動機構などを現場観測、数値実験、衛星画像解析の手法を用いて研究した。

化学海洋学講座　水産化学科海洋化学講座と北洋水産研究施設海洋生産学部門が統合されて当講座が構成された。松永勝彦（教授）、北洋水産研究施設から転じた米田義昭（教授、二〇〇〇年停年退官）と簗田滿（助教授）および桭木勇（助教授）、久万健志（講師）、工藤勲（助手）である。主として海洋を生物生産の場として捉える観点から、その生物生産に影響する無機・有機物質の分布や海水中におけるそれらの挙動について総合的に教育した。研究面では海洋での生産力を高めるための化学的要因、海洋の低次栄養段階における生産機構などに重点を置いて進めた。

生物海洋学講座　水産増殖学科の浮游生物学講座、水産食品学科の微生物学講座、北洋水産研究施設海洋生態学部門が統合されて当講座が発足した。教官は一九九六年箕田嵩の退官に伴い水産庁南西海区水産研究所から迎えた池田勉（教授、水産博）、繪面良男（教授）、北洋水産研究施設から転じた小城春雄（教授）、志賀直信（講師、後に助教授）、田島研一（助教授）、澤辺智雄（助手）、伴修平（助手）の七名の教官で構成された。海洋生態系（海洋生物ピラミッド）で重要な役割を果たしている個々の種の生物群集の生理・生態学に関する教育研究を行った。特に海洋環境下における細菌・動・植物プランクトン、魚類および海鳥類に及ぶ広範囲な生物群の個々の種の役割を解明するとともに、海洋生物間の相互関係を明らかにすることを目的に、これら生物群集の分類、分布、摂餌、排泄、生活史などの生理・生態学的基礎研究を進めた。

表２　学部改組後、1999年度の学科・講座・教官の配置

水産海洋科学科	
講　座	教官名
物理海洋学	教　授　岸　　道郎
	教　授　三宅　秀男
	助教授　磯田　　豊
	助教授　米田國三郎
	助教授　齊藤　誠一
	助　手　村上　　敬
	助　手　大西　広二
化学海洋学	教　授　松永　勝彦
	教　授　米田　義昭
	助教授　樫木　　勇
	助教授　簗田　　滿
	講　師　久万　健志
	助　手　工藤　勲
生物海洋学	教　授　池田　　勉
	教　授　綿面　良男
	教　授　小城　春雄
	助教授　田島　研一
	助教授　志賀　直信
	助　手　伴　　修平
	助　手　澤辺　智雄

海洋生産システム学科	
講　座	教官名
生産工学	教　授　烏野　慶一
	教　授　梨本　勝昭
	教　授　山本勝太郎
	助教授　蛇沼　俊二
	助教授　平石　智徳
	助教授　見上　隆克
	助　手　前川　和義
生産システム設計学	教　授　橋本　　忍
	教　授　三浦　汀介
	教　授　飯田　浩二
	助教授　向井　　徹
	助教授　山下　成治
	助教授　清水　　晋
	助　手　藤森　康澄
生産管理学	教　授　天下井　清
	教　授　廣吉　勝治
	助教授　木村　暢夫
	助教授　古林　英一
	助　手　甫喜本　司
	助　手　板倉　信明

海洋生物生産科学科	
講　座	教官名
育種培養学	教　授　荒井　克俊
	教　授　山本　弘敏
	助教授　後藤　　晃
	助教授　安井　　肇
	助　手　李　　大雄
	助　手　水田　浩之
機能生物学	教　授　麥谷　滌雄
	教　授　山内　晧平
	教　授　原　　彰彦
	助教授　清水　幹博
	助教授　矢部　　衛
	助教授　足立　伸次
	助　手　森　　司
生産基礎生物学	教　授　尼岡　邦夫
	教　授　中尾　　繁
	助教授　仲谷　一宏
	助教授　五嶋　聖治
	助　手　三浦　　猛
	助　手　野田　隆史
資源生態学	教　授　菅野　泰次
	教　授　髙橋　豊美
	助教授　西村　欣也
	助教授　中谷　敏邦
	助教授　桜井　泰憲
	助　手　松石　　隆
	助　手　髙津　哲也

海洋生物資源化学科	
講　座	教官名
生物機能学	教　授　西田　清義
	教　授　板橋　　豊
	助教授　尾島　孝男
	助教授　安藤　靖浩
	助　手　田中　啓之
生物化学工学	教　授　鈴木　　翼
	教　授　林　　賢治
	教　授　吉水　　守
	助教授　酒井　　信
	助教授　宮下　和夫
	助教授　山崎　浩司
	助　手　関　　秀司
	助　手　丸山　英男
	助　手　岸村　栄毅
食品生化学	教　授　関　　伸夫
	教　授　高橋是太郎
	助教授　今野久仁彦
	助教授　栗原　秀幸
	助　手　埜澤　尚範
	助　手　細川　雅史
食品機能化学	教　授　髙間　浩藏
	教　授　鈴木　鐵也
	教　授　猪上　徳雄
	助教授　佐伯　宏樹
	助教授　川合　祐史
	助　手　岡　　重美

附属三施設	
施　設	教官名
臼尻水産実験所	助　手　宗原　弘幸
洞爺湖臨湖実験所	助教授　上田　　宏
七飯養魚実習施設	助教授　山羽　悦郎

練習船・研究調査船	
施　設	教官名
おしょろ丸	教　授　安間　　元
	助教授　山口　秀一
	講　師　髙木　省吾
	助　手　亀井　佳彦
	助　手　木村　順一
北星丸	助教授　目黒　敏美
	講　師　梶原　善之
	助　手　坂岡桂一郎
	助　手　小林　直人
うしお丸	助　手　大越　金蔵
練習船研究室	助教授　宮下　和士
	助　手　岩森　利弘
	助　手　山本　　潤

第三節　大学院（重点化）改組――二〇〇〇年四専攻から二専攻体制へ――
環境生物資源科学専攻・生命資源科学専攻

一九九五年学科改組によって学部の教育研究体制が整えられた。これは従来の産業対応型の学科構成を改め、海洋環境の保全と水圏生物資源の健全利用に重点を置く学科構成に改組したもので、大学院重点化を視野に入れた学部機構改革の一環であった。

一方、一九五三年新制北海道大学大学院の設置に伴い、水産学部は水産学専攻の博士課程、修士課程を担当することになり、一九五五年三月に第一回大学院修士学位記授与式を挙行した。一九六三年に研究科の名称が水産学研究科と定められ、翌年には博士講座一六を数えた。その後博士講座が次々と設置されて、かつて一九五三年に一専攻で発足した研究科は一九六六年には水産増殖学、水産食品学、水産化学および漁業学の四専攻となって一九七二年には水産学部の全講座に博士講座が設置されるに至った。この間幾多の修士・博士を輩出し、国内外の水産に関する教育研究や行政、あるいは業界に多大の貢献を果した。しかし、今日の水圏の資源、環境に関わる複合的な課題に幅広く取り組むためには、研究分野が専門領域に片寄り過ぎたこれまでの大学院の教育研究システムでは対応しきれなくなった上に、一九九五年の改組による新しい学科体制で教育研究を受けた学生の大学院進学希望にも対応しきれない多くの矛盾が生ずることが危惧された。一九八八年に「大学院問題検討委員会」、一九九〇年に「大学院等整備構想検討委員会」を立ち上げて大学院改革を中心とする機構改革について検討を加えてきた。学部改組が実施された一九九五年以降、大学院改革（大学院重点化）の検討が精力的に進められ、二〇〇〇年四月からこれまでの水産学研究科を水産科学研究科と名称を変更し、二専攻一一講座体制で重点化大学院が出発した。大学院改革に中心的役割を果たした当時の研究科長山内晧平（教授）は振り返って次のように語っている。「改革案で一番

神経を使ったのは、大学のあり方が問われている中で、我々の水産科学という教育研究分野の独自色をどのように出していくのか、という点であった。大学の将来像を描いていて幾つか懸念される事があった。一つは大学入学者人口が減少している現実の下で、学部の規模が、しかも函館の地で維持していけるだろうか、ということ。これは学部のキャンパス問題に関わってくる重大な問題で、移転してもスクラップの対象にされない専攻にしたいということである。もう一つの懸念は水産科学のあり方である。科学技術の進歩はかつてないスピードで進み、それ自身の先鋭化と領域分野の融合を行いながら進行していて、われわれの分野もその例にもれない。将来的には研究科間の垣根は低くなるか、または無くなりアメリカの大学の様に、専攻が教育研究の単位になるかもしれない、と考えた。従って、改革案では専攻はできるだけ広くして、そこに基礎と応用が融合し、それぞれが水産科学の一翼を担う小完結型の専攻にした。ここが一番のポイントであった」。

新しく発足した大学院水産科学研究科は、「環境に調和した生物資源生産」をビジョンとする環境生物資源科学専攻の六講座と「多機能的生命資源創成」をビジョンにもつ生命資源科学専攻の五講座から構成され、水産学部の四学科教官は大学院二専攻に所属することになった。

一　環境生物資源科学専攻

多様性生物学講座　水圏生物の生物多様性（分類、形態、生態）とその形成・維持過程（進化、生態系）に関する教育研究を行う。学問分野はプランクトン学、ベントス学、魚類体系学である。教官は池田勉（教授）、仲谷一宏（教授）、中尾繁（教授）、志賀直信（助教授）、矢部衞（助教授）、五嶋聖治（助教授）、伴修平（助手）、野田隆史（助手）がそれぞれ配属された。

資源生産生態学講座　水産資源生物を含む生態系構成種の個体群の生活史、再生産、数量変動の機構および予測な

どの諸原理を明らかにし、水産資源の保全と持続的有効利用を図る教育研究を行う。教官に高橋豊美（教授）、小城春雄（教授）、西村欣也（助教授）、中谷敏邦（助教授）、桜井泰憲（助教授）、松石隆（助手）、高津哲也（助手）を配した。

資源環境科学講座　海洋環境を物理海洋学的、化学海洋学的および基礎生物生産学的手法で解析し、海洋生物資源の確保、環境収容力の評価、生物生産の場の創造、それらと調和した海洋環境の保全を目指す教育研究を行う。特に海洋生物資源にかかわる物理、化学および生物的海洋環境を学際的なアプローチで解析できる高度の専門知識と能力を有する人材の育成、ならびに学術研究の推進を図る。教官は岸道郎（教授）、三宅秀男（教授）、松永勝彦（教授）、久万健志（教授）、磯田豊（助教授）、簗田滿（助教授）、工藤勲（助教授）、村上敬（助手）、大西広二（助手）である。

資源計測学講座　衛星リモートセンシング、水中リモートセンシング、ダイレクトセンシング、の三分野を組み合わせて海洋生物資源量および生物生産環境を短時間から高密度に探査できる新しい推定法の開発とその応用を目的とする教育研究を行う。教官に三浦汀介（教授）、飯田浩二（教授）、齊藤誠一（教授）、清水晋（助教授）、向井徹（助教授）、藤森康澄（助手）を配した。

生産システム学講座　環境・生物・人間の共存が保障される持続的な漁業生産システムを実現するために漁業生産に直接関与する漁具・水産施設と持続的生産の維持管理にかかわる経営経済情報を一貫した生産システムとして捉え、海洋生物資源の生産と管理に関する高度の専門知識を有する人材の育成を図る。教官に梨本勝昭（教授）、山本勝太郎（教授）、廣吉勝治（教授）、平石智徳（助教授）、山下成治（助教授）、板倉信明（助手）を配属した。

生産工学講座　漁業生産の要素技術である漁船、海洋浮体構造物等の開発・設計や航海・漁労計器、漁労機械、水揚げ・選別装置、活魚槽、水産物処理装置等の開発・設計、および生産過程の作業条件を含む陸海における人間活

動の安全確保、防災等に関連して、製造から廃棄に至るまでの海洋生物生産を支援する工学的分野に関する理論と応用の教育研究を行う。教官に烏野慶一（教授）、天下井清（教授）、二〇〇〇年住友重機械工業から迎えた芳村康男（教授、工博）、見上隆克（助教授）、蛇沼俊二（助教授）、木村暢夫（助教授）、甫喜本司（助手）、前川和義（助手）を配した。

二　生命資源科学専攻

生命機能学講座　水圏生物資源の持続的活用に関する応用技術開発の基礎として、生理学、生化学、分子生物学などの手法により生体の代謝制御機構、ストレスタンパク質の発現機構、生殖機構、回遊機構などに関する教育研究を行う。教官に麥谷泰雄（教授）、山内晧平（教授）、原彰彦（教授）、清水幹博（助教授）、足立伸次（助教授）、三浦猛（助教授）、森司（助手）を配置した。

育種生物学講座　水圏有用種を対象に、最新の手法と従来の育種学的手法によって養殖並びに野生種の遺伝特性、有用形質の発現に関わる遺伝支配機構を解明し、それを基礎にして有効な育種法の開発と育成を目指す。また、野生生物の保存と育種管理のあり方について共生の理念に基づく総合的判断を可能にするための教育研究を行う。教官に荒井克俊（教授）、山本弘敏（教授）、後藤晃（助教授）、安井肇（助教授）、水田浩之（助手）、李大雄（助手）を配置した。

応用生物科学講座　水圏生物および生体高分子の特性・機能を解析し、それらを健全な人間生活に活用するための基礎的応用的教育研究を行う。有用遺伝子の利用、タンパク質、脂質、多糖、生理活性物質等の機能分子の活用に関する教育研究を通じ、水圏生物資源利用上の諸問題に対し最先端の理論と技術をもって対処し得る人材の育成を図る。教官に西田清義（教授）、高橋是太郎（教授）、繪面良男（教授）、吉水守（教授）、尾島孝男（助教授）、栗

原秀幸（助教授）、田島研一（助教授）、田中啓之（助手）、澤辺智雄（助手）を配置した。

生物資源化学講座　水圏生物が産生する多様な成分を含む物質がもつ機能を高度利用するための科学技術の開発と応用に関する教育研究を行う。水圏や水圏生物に含まれる機能性物質の解明と多面的利用開発、有用物質創出のために海洋生物から取り出した酵素などの機能利用、有用物質創出過程で生ずる有害物質の除去などが教育研究の主な分野である。教官は板橋豊（教授）、鈴木翼（教授）、林賢治（教授）、宮下和夫（教授）、安藤靖浩（助教授）、細川雅史（助教授）、関秀司（助手）、丸山英男（助手）、岸村栄毅（助手）が配置された。

表３　大学院改組後、2000年度の専攻・講座・教官の配置

環境生物資源科学専攻		生命資源科学専攻	
講座	教官名	講座	教官名
多様性生物学	教授　池田　勉	生命機能学	教授　麥谷　崇雄
	教授　仲谷　一宏		教授　山内　晧平
	教授　中尾　繁		教授　原　彰彦
	助教授　志賀　直信		助教授　清水　幹博
	助教授　矢部　衛		助教授　足立　伸次
	助教授　五嶋　聖治		助教授　三浦　猛
	助手　伴　修平		助手　森　司
	助手　野田　隆史		
		育種生物学	教授　荒井　克俊
資源生産生態学	教授　高橋　豊美		教授　山本　弘敏
	教授　小城　春雄		助教授　後藤　晃
	助教授　西村　欣也		助教授　安井　肇
	助教授　中谷　敏邦		助手　李　大雄
	助教授　桜井　泰憲		助手　水田　浩之
	助手　松石　隆		
	助手　高津　哲也	応用生物科学	教授　西田　清義
			教授　高橋是太郎
資源環境科学	教授　岸　道郎		教授　綿面　良男
	教授　三宅　秀男		教授　吉水　守
	教授　松永　勝彦		助教授　尾島　孝男
	教授　久万　健志		助教授　栗原　秀幸
	助教授　磯田　豊		助教授　田島　研一
	助教授　築田　滿		助手　田中　啓之
	助教授　工藤　勲		助手　澤辺　智雄
	助手　村上　敬		
	助手　大西　広二	生物資源化学	教授　板橋　豊
			教授　鈴木　翼
環境計測学	教授　三浦　汀介		教授　林　賢治
	教授　飯田　浩二		教授　宮下　和夫
	教授　齊藤　誠一		助教授　安藤　靖浩
	助教授　清水　晋		助教授　細川　雅史
	助教授　向井　徹		助手　関　秀司
	助手　藤森　康澄		助手　丸山　英男
			助手　岸村　栄毅
生産システム学	教授　梨本　勝昭		
	教授　山本勝太郎	水圏食糧科学	教授　関　伸夫
	教授　廣吉　勝治		教授　高間　浩藏
	助教授　山下　成治		教授　鈴木　鐵也
	助教授　平石　智徳		教授　猪上　徳雄
	助手　板倉　信明		助教授　今野久仁彦
			助教授　佐伯　宏樹
生産工学	教授　天下井　清		助教授　山崎　浩司
	教授　烏野　慶一		助教授　川合　祐史
	教授　芳村　康男		助手　埜澤　尚範
	助教授　木村　暢夫		助手　岡　重美
	助教授　見上　隆克		
	助手　甫喜本　司		
	助手　前川　和義		

水圏食糧科学講座　水圏生物を食糧資源と捉え、その有効成分を食品の形態で最大限に利用するために、成分特性の分子レベルでの解明、その利用方法、安全性などに関して理論的、技術論的に教育研究する。教官は関伸夫（教授）、高間浩臧（教授）、鈴木鐵也（教授）、猪上徳雄（教授）、今野久仁彦（助教授）、佐伯宏樹（助教授）、山崎浩司（助教授）、川合祐史（助教授）、埜澤尚範（助手）、岡重美（助手）を配置した。

第二章　実験所・施設等の変遷

第一節　忍路臨海実験所・臼尻水産実験所・洞爺湖臨湖実験所・七飯養魚実習施設

一　忍路臨海実験所

東北帝国大学農科大学水産学科の実習所として、地元有志より寄付された忍路村（現在は小樽市忍路）に発足した。一九〇六年に設置許可され、一九〇八年に落成した。一九一八年に現在の名称になる。水産専門部が北大から離れる際一九三五年に大学本部所属に変わり、農学部水産学科発足でその所属となり、同学科の函館移転後は水産学部所属に変わり、臼尻水産実験所発足後は北大共同利用施設となった。古い時代の記録はないが、一九四〇年以降の主任には、羽田良禾、斎藤三郎、元田茂、小林新二郎、新山英二郎、岡田雋、共同利用施設に変わって黒木宗尚（理、一九七四～七五、八〇～八一年）、岩田文男（理・教養、一九七六～七七、八三～八四年）、星元紀（低温、一九七八年）、小畠陽之助（薬、一九七九年）、堀浩（理、一九八二年）、三宅教尚（薬、一九八五年）、高橋英紀（環

境研、一九八六年）、吉田忠生（理、一九八七～八八、九一～九二年）、馬渡駿介（理、一九八九～九〇、九三～九四年）、増田道夫（理、一九九五～九六、九九～二〇〇〇年）、片倉春雄（理、一九九七～九八年）が着任している。本実験所では、水圏生物に関する様々な教育・研究が行われ、成果をあげているが、これは当地の優れた自然環境によるものと考えられる。当地を選定した野沢俊次郎の卓見が忍ばれる。

二　臼尻水産実験所

一九四九年の水産学部発足にともない、狭隘で函館から遠隔地にあった忍路より、現在の南茅部町臼尻に一九七一年、当臨海実験所が開所された。一九七二年には宿泊棟も落成、一九七五年には助手定員一名も認められて、水産植物学講座から山本弘敏（助手、水産博）を迎え、同氏の水産植物学講座転任の後、一九九二年からは宗原弘幸（助手、水産博）が着任している。歴代の主任には、岡田雋、辻田時美、正置富太郎が、所長には五十嵐孝夫、尼岡邦夫、山本弘敏、中尾繁が併任している。

所在地の南茅部町臼尻は、函館市から北東に約四〇キロメートル離れた太平洋に面した位置にあり、千島寒流と津軽海峡を東に抜ける対馬暖流の接合点にあたり、両海流の影響を受けている。相対的には寒流の勢いが強く寒流海域と言えるが暖流系の魚類も多彩であり、生物層に富んだ海域である。また、噴火湾の湾口部に位置するため、内湾的海峡の影響を多分に受けている。このような環境下での立地条件を生かして、寒流海域の生物相および海洋を調査・研究の対象とし、水産動物学、動物行動学、海洋生態学、水産増殖学の基礎研究、技術開発などが行われてきた。このなかで、（一）マコンブのイカダ養殖の基礎の構築、（二）ケガニの性フェロモンの単離、（三）データロガーによる鯨類の潜水行動、（四）血縁判定に基づく魚類の行動生態研究など、世界あるいは国内で特筆すべき研究成果があげられた。これらに加え、ネズミイルカの短期間の飼育や、飼育下におけるスケトウダラの繁殖行

動実験、スルメイカの水槽内での産卵実験など、臨海実験所でなくては成し遂げられない成果をあげている。

三　洞爺湖臨湖実験所

水産学部の前身である函館高等水産学校発足のころ、「魚類の人工増殖及び繁殖保護に関する学理とその応用を研究及び教育すること」を目的とし、一九三五年に洞爺湖漁業組合から現在地にあった孵化場の寄付を受けた民有地を拡充し、一九三六年に臨湖実験所を開設した。その後、一九六六年に「北方域における魚類の増殖と陸水学的研究・実験及び実習」を目的として実習施設としての官制化がなされた。一九七四～七五年には老朽化した一部の施設も改築され、さらに一九九八年には官舎の新築と旧官舎の宿泊施設化がなされた。歴代の主任として、大友渉、所長として、元田茂、新山英二郎、川村輝良、黒萩尚、箕田嵩、上田宏（助教授、水産博、医博）が着任している。このうち常駐教官は、大友渉（一九三六～七一年）、黒萩尚（一九七一～九一年）、上田宏（一九九一年）である。

実験所では実習指導のほか、最新の湖水環境調査と魚類資源調査を行い、栄養塩類から魚食性魚までの食物連鎖を解析することで、人為的な魚類放流が湖水環境と魚類資源に与える影響を解明している。これらの成果は、湖水環境保全と魚類資源管理を両立させる環境管理の基礎データとして期待されている。また、ヒメマスをモデルとした母川回帰機構の解析が行われ、ホルモン投与による魚類の母川回帰行動の制御に役立つものとして国際的に高い評価を得た。

四　七飯養魚実習施設

水産学部前身の函館高等水産学校での養魚実習のため、一九四一年亀田郡七飯村大字本町に民有地を購入したことにはじまる。戦後の一九四九年ころから素人工事の池、屋外に並べた水槽などで試験や実習が始められ、一九五

九年より数カ年にわたり、逐次本格的な建物、池の構築がなされた。一九六六年に「魚類の人工増殖及び繁殖保護に関する学理とその応用の研究及び教育」を目的とする施設規程の制定が行われ、官制の施行により、助教授一、技官一の定員が配置された。初代の教官は、淡水増殖学講座から久保達郎（助教授、後に教授、農博）が迎えられた。久保の退官後、一九八三年に発生学・遺伝学講座から小野里坦（助教授、水産博）が着任した。一九八六年小野里の水産庁転出の後、一九八七年に水産庁から原彰彦（助教授、水産博）が着任し、さらに一九九五年の学部改革に伴う原の水産学部異動の後、発生学・遺伝学講座から山羽悦郎（助手、後に助教授、水産博）が着任した。歴代の施設長は、山本喜一郎、久保達郎、小野里坦、高橋裕哉、原彰彦、山羽悦郎が着任している。

開設当初は養鯉にはじまったが、教官が常駐してからサケ・マス類を対象に研究が行われるようになった。これまで、サクラマス及びオショロコマの生活史に関する研究、魚類の染色体操作によるバイオテクノロジー開発の研究に多大な業績を残した。また、免疫生化学的なアプローチによる生殖生理の研究が進められ、この基礎研究より内分泌撹乱物質の影響を魚類を用いて行う評価法が確立された。さらに、木村志津雄（技官）による飼育水槽の改良とその実用新案、イトウの養殖技術の確立、突然変異種である無斑サクラマス、アルビノイトウの系統樹立がなされた。イトウ養殖は、原と木村により、青森県鰺ケ沢町に技術移転されている。

第二節　水産資料館

一九五七年の水産学部創基五〇周年にあたり、その記念事業として、水産学部同窓会が水産標本館の建設・寄付を決定した。そして、一九五八年七月に水産博物館として開館したのが現在の水産資料館本館である。一九六四年には、水産博物館という名称が博物館法上の博物館に該当しない、などの理由でその名称を水産資料館と改め、現

在に至っている。

水産学部は、その前身の札幌農学校水産学科として一九〇七年に発足して以来、北海道・樺太・千島・ベーリング海などの北方海域や河川の生物を中心に収集し、整理分類して教育や研究に用いてきた。東北帝国大学農科大学水産学科や北海道帝国大学附属水産専門部時代には、一九〇八年に小樽で開催された水産共進会、一九一九年に札幌で開催された開道五〇周年記念共進会に出品された品々を水産講堂の標本室に展示していた。一九三五年、函館に移って函館高等水産学校となった際には、校舎正面玄関の二階に標本室と北洋漁業関係資料を集めた北洋室を設置し、両室の水産関係の資料はさらに整備されていった。一九四五年、校舎は進駐軍の兵舎として接収され、上記の水産関係資料は当時市内谷地頭（やちがしら）にあった旧津軽要塞司令部倉庫に移されたが、この間に多くの資料が破壊、紛失した。校舎の返還後は、経済混乱や入学学生数の増加で、校舎が狭隘となり両室は復元されなかった。この様な歴史を経て、これらの標本類を基礎として開館したのが、資料館本館であった。

一九八二年の水産学部創基七五周年には、水産学部同窓会が母体となった創基七五周年記念事業後援会が、水産学部の歩みや歴史的資料を展示するための附属建物を建設寄付することを決定し、同年十月に着工、翌一九八三年三月に竣工落成、水産資料館別館として開館した。さらに、一九八八年には、一九六〇年に大洋漁業株式会社から寄贈された旧北洋水産研究館を改装し、水産資料館附属の水産生物標本館として整備された。

水産資料館本館には三標本展示室があり、第一標本室には魚類を中心とした生物標本類が、第二標本室には漁船・漁具類が、第三標本室には水産加工品などが展示されている。また、水産資料館別館には水産学部の歴史的な資料類、水産学部所属練習船の模型類、動物の剥製標本類などが展示されている。これらの資料や標本類は一般にも公開され、学生の教育にも用いられている。また、水産生物標本館には世界の水域の膨大な魚類標本が収納されている。これらのコレクションは教官や大学院生には勿論のこと、世界の魚類学者に利用され、ＨＵＭＺ（北海道大学

の魚類標本の機関略号）標本として世界屈指の標本として高い評価を受けている。

水産資料館は北海道大学総合博物館が一九九九年四月に設置されると同時にその機構下に入った。水産資料館には水産学部水産動物学講座が総合博物館に供出した助手枠が割り当てられ、今村央（助手、水産博）が大学博物館助手として常駐、資料館の管理運営や標本類の維持管理・貸し出しなどの業務を行っている。

第三節　北洋水産研究施設の終焉

北太平洋亜寒帯海域における生物生産機構の解明を基幹研究として、一九六三年北洋水産研究施設の官制が敷かれ、まず漁業部門の一部門が設置された。続いて一九六六年に海洋部門が増設されて二部門体制で研究が行われてきたが、一九八〇年に至って新部門の増設が認められ、ここに現体制の三部門からなる新たな研究態勢を整えた。三部門の内容は次のとおりである。

海洋生態学部門　最初に設置された部門で一九八七年三島清吉教授（水産博）が停年退官のあと、島崎健二（教授、水産博）に一九八四年漁業部門から転じた小城春雄（助教授、水産博）を加え、一九八七年青森県営浅虫水族館から桜井泰憲（助手、水産博）が加わった。北太平洋亜寒帯海域における高次階層生物の海洋生態学的研究を行った。

海洋環境学部門　一九八六年福岡二郎（教授、理博）の停年退官に伴い、梶原昌弘（教授、理博）、三宅秀男（助教授、水産博）の二教官が亜寒帯海域の水塊構造、流動、湧昇流等低次生産に関与する物理的海洋特性に関する研究を継続してきた。

海洋生産学部門　三部門のうち、最も新しく一九八〇年に開設された。三島清吉（兼担）の停年退官に伴い、一九八七年、米田義昭（教授、水産博）と一九八七年水産化学科海洋化学講座から迎えた簗田滿（助教授、水産博）の

二教官で亜寒帯海域における低次生産機構と外部環境要因との関係に関する研究が進められてきた。

研究活動が中心の北洋水産研究施設は、修士・博士課程学生の研究指導も行い、論文博士を含め多くの修士・博士を輩出した。海洋生態学部門からは大学院修了の九名が水産庁の研究所で現役として活躍している。また施設業績集や北洋シンポジウムを通して北太平洋亜寒帯海域に関する研究活動は国内外の研究者から高く評価されてきた。従来の有用魚族の研究に加え、海鳥、海獣を含む食物連鎖を経て低次より高次に至る生物生産システムととらえた解明が着々と成果をあげ、今後その複合的な要因の統一的な解析が期待されていた。

一九九五年の学科改組により、北洋水産研究施設の三部門は水産海洋科学科に再編され、ここにその輝かしい歴史を閉じることになった。しかし、北洋の生物資源がわが国にとって極めて重要な位置づけにあることから北太平洋亜寒帯海域の物質循環に関する研究は、組織体制を越えて継続発展されることが望まれている。

第四節　留学生相談室

一九九三年四月一日から吉水守（講師、現教授）が、水産学部留学生専門教官になり、同年六月一日に水産学部留学生相談室が、現在の第二研究棟（旧北洋研）の一階に開設された。その後、一九九五年四月から現在（二〇〇〇年）まで、久万健志（講師、現教授）がその任についた。留学生相談室開設当時は約二〇名前後の留学生数であったが、現在では二六名と今後増加する傾向にある。留学生の出身国別にみると、韓国と中国が最も多く、次に東南アジア諸国（インドネシア、マレーシア、タイ、フィリピン）、インド、バングラディシュ、エジプト等、アジア系の留学生の割合が多いのが特徴である。

水産学部は札幌キャンパスから離れているため、水産学部所属の留学生は札幌キャンパスの留学生センターを利

用できず、留学生の諸問題に対する対応や学内交流及び地域社会との国際交流は水産学部独自でおこなわなければならない。そこで、留学生相談室が一九九三年からその窓口となるよう開設された。この相談室では、留学生からの相談、留学生によるミーティング、国際交流の窓口、海外の情報収集、日本語教育の場として、常に留学生が利用できるようにしている。また、水産学部留学生らが独自にインターナショナル・フレンドシップ・アソシエーションを組織し、新留学生歓迎の花見、ハイキング、スポーツ大会、大学祭参加、送別会等を行って、日本人学生を含めた留学生同士の親睦を深めており、留学生専門教官がそれらの行事をサポートする体制になっている。また、学部では、毎年、留学生研修旅行と懇談会を行い、留学生同士及び留学生と教職員との親睦をはかっている。今までの研修旅行では道南地方を中心に、北海道立栽培漁業総合センター、北海道立漁業研修所、さけ・ますふ化場、知内ウニ種苗センター、吉岡ヒラメ養殖センター、函館カール・レーモン工場、水産学部附属施設などの見学をしてきた。留学生は、大学で学ぶ以上に、実際の養殖事業や研修施設見学に興味を示し、担当者に多くの質問をしていたのが印象に残る。

地域社会との交流では、函館市内とその周辺の町との交流がある。例えば、中学校主催の国際交流集会、町の青年国際交流会、ロータリークラブとの交流、着物婦人会との交流、ホームステイ、他団体行事（英語、中国語、国際料理教室の講師）のサポートと様々である。これらの交流の中には、留学生やその家族が気楽に参加できる楽しい企画がたくさんあり、留学生と日本人の個人的交流の場として、発展している。最近では、積極的にいろいろな行事に家族とともに参加するようになり、日本での忙しい勉強の合間の時間を楽しもうとしているようだ。このような個人的つながりが、真の国際理解、その後の国際協力に発展するよう期待している。

相談室での留学生の相談内容について、最も重要な一つに、私費留学生の奨学金がある。函館市からの奨学金並びに一九九七年からロータリークラブ（函館五稜郭、函館）独自の奨学金制度がスタートし、水産学部の私費留学

生が援助を受けられるようになった。しかし、私費留学生数も年々増加傾向にあり、すべての私費留学生が奨学金の援助を受けているとはかぎらないのが現状である。留学生の研究上の問題については、所属講座内で解決されていると思われるが、全てが解決されているとはかぎらず、悩みや問題点を留学生が直接指導教官に打ち明ける事ができないこと、また指導教官が留学生をどのように扱えばよいかという悩み等、お互いのコミュニケーションが重要である。今後、指導教官、留学生専門教育教官、事務官、留学生のより一層の相互協力が必要となるだろう。留学生が研究勉学に集中できるよう、また日本での有意義な留学生活が送れるよう支援しなければならない。

第五節　事務部体制

水産学部の歴史的変遷や教育研究組織の移ろいは詳述されている。しかし、学部を支援する事務部についての記録は極めて少ない。『北大水産学部七十五年史』によれば、一九〇九年十一月にはすでに事務組織が設けられており、事務長の指揮のもとに書記が置かれ、現在の事務組織を形づくる基礎となる記述がわずかに見られる程度である。

このたびの調査で得られた資料によれば、一九四九年の新制大学発足当時の水産学部の事務部組織は、事務長傘下のもとに、庶務掛、会計掛、船舶掛など、一九七七年に増設された営繕掛を除いて、現在とほぼ同じ六掛が置かれ、事務官や雇、給仕といった職名を付された職員が配置され、各掛ごとの職員数も多いところでは一〇名で構成されている。その上、電話交換室や警務員室、小使室、暖房室、大工室、変電室など、いわゆる「現業部門」と称される部署が置かれ、ほとんどの業務が「直営」で行われていたことが窺われる。

しかし、一九八三年の閣議決定「臨時行政調査会の最終答申後における行政改革の具体化方策」を受けて、翌一

九八四年から始まった技能・労務職員等の採用抑制措置により、以後現業職員は不補充措置が講じられたため職員数も激減し、また、一方では電話交換業務の廃止計画などに従い、相次いで事務官や技官に異動となっていった。

他方、一九六九年に始まった国家公務員の第一次定員削減計画は全学に等しく割り当てがあり、水産学部においても二〇〇一年の第九次削減計画までの約三〇年間に五十数名の事務職員を逓減するに至っている。

現在、年度が改まって大学院水産科学研究科の部局化に伴って、新設された四専攻事務室の職員を含め、すべての事務職員が「水産科学研究科・水産学部事務部」に配置換になった。この先、現事務体制がどう維持され展開していくのか。国立大学そのものの先行きに不透明な部分を残しながらも、研究科や学部の進展に合わせ、ひとときも立ち止まることなく、常に自己改革を遂げながらその歩みを共にしなければならない。

第三章　練習船――研究調査船・二〇〇二年三船体制から二船体制へ――

第一節　練習船

札幌農学校に水産学科が創設され二年後に練習船忍路丸が建造された。水産学科は数度の沿革を経て二〇〇〇年四月、大学院の重点化改組に伴い「北海道大学大学院水産科学研究科・北海道大学水産学部」の発足となった。練習船はおしょろ丸Ⅳ世が就航一六年を経過し北星丸三世と共に運航され、北洋・太平洋・インド洋及び日本近海の海域を稼働して学生の教育と調査・研究に携わってきたが、一九七七年米ソ両大国の突然の二〇〇カイリ設定を契

機に、各国の二〇〇カイリ水域の囲い込みに加えて、公海漁業への規制の強化が年ごとに厳しさを増してきたことに伴い、日本の遠洋漁業の縮小と減船は漁業学科学生の就職に大打撃となった。更に「国連海洋法条約」が一九九六年に批准された。海洋環境の保全や資源管理が国際的社会問題化の今、練習船の学部教育への参加の在り方や国際共同研究への参加・協力に伴う運航体制の確立は必要不可欠のものとなった。特に北星丸減船後のうしお丸運航の成否は練習船の存続に係わる重大事と成るであろう。さらに次なるハードルは「国立大学の独立行政法人化」であるが、急速に変貌する社会情勢への対応は将来への展望を熟慮の上なされるべきは当然の事ながら、「海を知らずしては何の解決も無い」事を基本に教育と調査・研究に希望の持てる「練習船の在り方」の実現が切望される。

第二節　おしょろ丸Ⅳ世

一九八三年に竣工し、総トン数一三八三トン、国際総トン数一七七九トン、船尾トロール型、主機ディーゼル三二〇〇馬力、航海速力一三・四ノット、可変ピッチプロペラ・バウスラスター装備で、ハイブリッド航法装置等最新の各種航海計器類、計量魚探機、トロール漁業解析装置等漁業監視用機器、電子計算機を装置し、調査・観測用機械器具及びトロール・ウィンチ（一九八五年新替）・マグロ延縄・流し網の漁撈機械類の油圧駆動化を図った新鋭練習船である。

一九八四年六月、北大・長崎大の特設専攻科（以下、特専と略）学生、研究員を乗せて北洋航海を実施した。二〇〇カイリ外で一八〇度経度線に沿ってのサケ・マス流し網、延縄による標識放流、海洋観測を行った。セジメント・トラップの揚収と設置をしてセワードに寄港すると、アラスカ大学職員はじめ当地の市民から歓迎され、次に州都ジュノーに寄港するとオークベイ研究所所員の皆さんや市民の皆さんから新造船おしょろ丸は大歓迎された。

そして当地より研究員が乗船して西経一五五度線に沿って北緯五五～二五度で流し網による漁獲調査・海況調査を実施の後ハワイに寄港した。二〇〇カイリ時代にも拘わらず寄港先で多くの方から歓迎された印象深い航海であった。その後も年間五航海の運航計画は二〇〇カイリの外で従来どおりに続けられた。

一九八五年の南方航海には特専・特専志望の漁業学科四年目学生を乗せて、戦後初めて釜山に寄港した。最も近いのに最も遠い存在の隣国とのイメージは釜山水産大学校の教官・職員の皆さんと学生諸君の歓迎や交歓会によって払拭され、間違った概念を抱いていた事に気恥ずかしさを痛感した。これらの事は一九六二年の国際インド洋調査に参加して、おしょろ丸Ⅲ世に乗船した張善徳教授のご厚意を多とする所と深く感謝した。

一九八六年の南方航海では中華人民共和国農牧漁業省より招請書を戴き、日中漁業交流と人民友好を促進するため佐藤修学部長同航の上、上海に寄港した。連日の熱烈歓迎行事に感謝し疲労を感ずる程だった。五名の漁業研修者を便乗させ、インド洋でのマグロ延縄漁業を研修させたが、航海中の学生との生活体験はお互いに良い経験となった事と確信する。

一九八八年の南方航海では海外漁業協力財団よりミクロネシア連邦海域での資源調査を依頼された。サンゴ礁付近の一本釣・環礁内での流し網の可能性・ポンペイの二〇〇カイリ内マグロ資源調査である。隔年に三度実施を計画した。環礁内での流し網は環礁内の潮流が意外に早くて複雑なために、網がダンゴ状になってしまい大失敗だった。ポンペイでの船上レセプションにはＪＩＣＡよりこの国に派遣中のキャプテン本田（二五年遠洋漁業科卒）の母校の練習船とのことで、ハグレグガム大統領夫妻が臨席された。大統領はベニサケの刺し身を賞味しつつミクロネシアの漁業資源開発の重要性について大いに語っていたのが印象深かった。

一九八九年の南方航海では本学部と釜山水産大学校との間で「東シナ海における底魚類の音響による資源調査システムの高度化に関する研究」に付いて共同研究する運びとなり、両大学よりスタッフ数名が乗船し計量魚探機・

トロール解析装置等を駆使して調査が行われた。東シナ海は周辺各国の意見調整が出来ず二〇〇カイリの囲い込みはなされなかったので四年間調査を継続し、その成果につき一九九三年水産学部に於いて日本・韓国・中国・台湾・ノルウェーから参加して「底魚類資源調査に関する国際シンポジウム」を開催した。

練習船の共同利用については従来長崎大学より特専の学生がおしょろ丸に乗船してきていたが、相互利用が図られ一九九四年十月、本学特専志望の漁業学科四年目学生が鶴洋丸で乗船実習をすることになり、翌年から特専の学生が四～五月の間長崎丸で乗船実習をすることになったので、おしょろ丸の南方航海は他の学科の調査航海に振り替えられた。その他、ガイダンス航海・フレッシュマン教育航海など学部一年目学生、全学部学生中の志望者に乗船体験させる航海が加わった。

一九九五年四月、本学は学部改組を実施し新しい四学科を設けた。しかし、特設専攻科に入学を志望する学生は選択科目を履修する事によって進学可能であったが、一九九八年四月入学の学生からはその学部教育を廃止した結果、二〇〇三年三月を以て特専教育は終了する。それに伴い北星丸の減船が決められた故、おしょろ丸の運行体制について検討しなければならない時が来た。

第三節　北星丸三世

一九七六年、船尾トロール・サケ・マス流網、マグロ延縄、旋網を行える、また各所にコンピュータシステムを導入し、画期的な漁業練習船として、新潟市株式会社新潟鉄工所で建造された。

一九七七年からは五カ年計画の遡河性サケ・マスの大量培養技術の開発に関する総合研究（農林水産技術会議）に参加、離岸期サケ幼魚の分布生態とその生育水域の生物生産の究明に寄与した。

日米加露間の国際漁業協定に基づくサケ・マス資源調査の日本側科学調査船として、二世に引き続いて参加し、北太平洋に来遊するサケ・マスの大陸起源及び資源の動向解明に寄与している。

一九七八年以降現在まで調査海域を亜寒帯から亜熱帯域にも拡大して調査定点を設定して、夏季に流網による漁業実習を通してモニタリング調査を実施し、実習生に対し単なる漁獲技術習得のみならず生物生産と海洋との関わりを体系的・科学的に学ばせる実習教育を行って、夏季の亜寒帯の表層海域がサケ・マスに限らず、亜熱帯性魚類・イカ類の重要な索餌海域となっている等貴重な情報を提供し、おしょろ丸と共に、国際的にも注目される北太平洋極前線付近の海洋環境と生物群集の、長期変動に関する先駆的な研究成果をあげた。

毎年一月上旬に出航の南方航海は、一九八〇年からはハワイ諸島南西海域でマグロ延縄実習を行い、ホノルル寄港後、アメリカ側研究機関（ＮＯＡＡホノルル研究所、ハワイ大学）と共同で、ハワイ諸島二〇〇カイリ水域内におけるイカ類の分布及び資源量の調査を行っている。

一九八七年から九カ年に亘る、秋季の北海道南西部の中層トロールによる、スケトウダラの産卵前期の沖合調査は、その後に始まる漁期の漁況予測に有効な指標となった。また、一九八六年から九カ年、歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島の北方領土墓参に協力し、延べ五一二人の墓参団の移送を行った。

昨今、海洋生物資源、気候変動、海洋汚染等、地球環境の変動に伴い、海洋を研究の場とする学問分野が重要視され、学内外、国内外から、大学院教育や、水産・海洋調査研究への練習船の有効利用の需要がますます増大してきているが、本船は二〇〇二年をもって役目を終える。

第四節　研究調査船うしお丸

研究調査船初代うしお丸は一九七一年日本鋼管株式会社・横浜ヨット株式会社で建造された。総工費九五〇〇万円、総トン数九七・七八トン・主機関四〇〇馬力ディーゼル機関、可変ピッチプロペラ装置及び船体動揺減衰装置を有する定員一二名（乗組員六名、学生教官六名）の船尾トロール型第三種漁船として誕生した。当初研究用潜水艇くろしお号の母船として併用されたが、主として本学の学生、院生、教官の海洋における実験実習、院生、教官の研究調査を行っている。

調査海域は主として噴火湾、北海道南部、津軽海峡、陸奥湾等である。一九八一年函東工業株式会社において総工費一五〇〇万円で船体延長（二メートル）を行い、船体の内部を一部改造し居住区の改善と耐航性を高め海洋観測機器と航海計器の充実をはかった。一九九二年五月任務を終えるまで総航程九万三三九九マイル、乗船学生、院生、教官延べ九七四八名を数え、実験、実習、研究調査に大きな役割を果たし、多くの知見が得られ学術研究と教育に多大な成果をあげた。歴代船長は坂口延一・森田省二・松島完治である。

うしお丸二世は一九九二年三井造船株式会社・株式会社讃岐造船鉄工所で総工費六億四〇〇万円、総トン数一二八トン、主機関一〇〇〇馬力ディーゼル機関、可変ピッチプロペラ装置、バウスラスター・スタンスラスター（船首・船尾船底に横方向のプロペラ装置）及び船体動揺減衰装置を有する定員一九名（乗組員七名、教官四名、学生八名）の船尾トロール型第三種漁船として建造された。操船が安全かつ容易に行えるようバウスラスター・スタンスラスター・主機関連結の可変ピッチプロペラ及び舵を連続自動制御可能な簡易操縦装置を設けている。この装置を用いると船の針路、位置、姿勢等の保持を実現し、低速航行時の航路保持、その場回頭、横方向への移動が可能である。

搭載研究設備の充実をはかるため最新で高性能の各種電子機器、航海計器、水中音響機器を設置し、研究調査においては膨大な量の観測データを扱うため船内にデータ通信ネットワークを設け、気象、航海、機関、漁撈及び諸観測のデータ等を収集し各研究室での処理の一元化を図っている。データは指定された周期でディスクに収集され必要に応じて取り出すことができる。収集時はラインコンピューターのＣＲＴにてデータの収集状態をモニタリングすることができる。

現在年間平均一二〇日の航海で延べ五〇〇人の学生、院生、教官が乗船し、各種の実験、実習、研究調査を行っている。現在要求されている高水準の教育、研究調査において応用技術を通し高度なデータ収集と各種作業の支援が可能な研究調査船である。歴代船長は松島寛治、大越金蔵である。

第四章　北水同窓会の歩み

札幌農学校が発足したのは、一八七六年であり、この中に水産に関する学科がなかった事は、当時の状況からして当然と思われるが、その後札幌農学校の米国人教師ジョン・Ｃ・カッター、続いて藤田経信（教授）らにより、水産学の必要性が述べられた結果、一八九三年二月の農学部教官会議において、水産学科を「設置すべし」との案が提出されたが、決議に至らなかった。その後一九〇一年水産学科新設の要望が世論にも高まり、一九〇五年十二月、ついに全国唯一の直轄高等水産教育機関として、札幌農学校に水産学科の新設が決定され、修業年限三カ年として一九〇七年発足した。これが現在の北大水産学部―函館水産専門学校―函館高等水産学校―北海道大学水産専

門部の始まりである。

入学当時の第一期生は、知識欲も旺盛で、その具体的方策として、「オコック会」なる研究会を教官と共に開催し、種々成果が発表されていた。これが北水同窓会の発端ともいえる。この「オコック会」の機関誌名を『親潮』として、研究発表の外、同窓生の動静、名簿などを掲載して、卒業生に配布していたが、卒業生も次第に多くなり、一九二二年第一五回総会において、「オコック会」と「同窓会」を分離することが決まり、一九二三年十月に北水同窓会誌として『親潮』第一号が発行された。

一方別組織となった教官、OB、在学生が一体となって運営していた「オコック会」の機関誌『オコック会誌』は、その後に年一回は発行され、水産専門部が函館に独立移転後も、同様に続けられていたが、一九四一年戦時体制に即応する為、「オコック会」は解散し、函館高等水産学校報国団として生まれかわった。しかし『オコック会誌』はその後も名称を『水産学雑誌』と改め、年一回その研究成果の発表の場として刊行されていたが、全国組織の「日本水産学会」が結成されてからは、教官もこれに投稿する人が多くなり、一九四九年『水産学雑誌』も発刊中止となった。

北水同窓会の名称は、函館移転独立後一九三五年名称を簡略化するために、「北水会」と改められたが、一九四八年には北海道の水産団体と混同しやすいとして、再びもとの「北水同窓会」にもどった。

機関誌『親潮』の内容は、今迄同様卒業生の近況、動静の他に一年おきに卒業生の名簿もつけられていた。一九三五年前後から戦火も次第に拡大し、戦地におもむく卒業生も多くなり、その動静や、戦地からの便りのほか、戦死者の氏名等が掲載される様になった。一九四五年の敗戦迄になくなった卒業生の戦没者数一六五名、内函館高等水産時代の卒業生三九名であった。

一九四五年の敗戦以後の『親潮』の内容は、卒業生の投稿原稿のほか、各地で行われた支部総会、クラス会等の

記事が多くなった。

会員名簿も、前述の様に、機関誌『親潮』の付録として発行されていたが、卒業生も多くなり一九五五年十月より別冊として隔年に発行される様になり、初年度は年会費三〇〇円の外に名簿負担金として一〇〇円計四〇〇円を納入した卒業生に配布したが、次回からは、会費納入者に無料で配布し今日に及んでいる。名簿の内容も、卒業生の年次別氏名の他に、一九五九年より地方別、勤務先別（会社別）に分離されたものが掲載される様になり、卒業生との連絡も容易になった。

北水同窓会を代表する会長には、初代村山佐太郎（在任期間以下同様一九二二～二八年）、第二代田中清三郎（一九二九～三四年）、第三代佐々茂雄（一九三五～四三年）、第四代村山佐太郎（一九四四～四七年）、第五代富田朝一（一九四八～五二年）、第六代渡辺宗重（一九五三～五五年）、第七代村山佐太郎（一九五六～六七年）、第八代岡井正男（一九六八～七五年）、第九代田村正（一九七六～八三年）、第一〇代小林信三（一九八四～九一年）、第一一代遠藤信二（一九九二～九四年）、第一二代宮原九一（一九九五～九八年）で、現在は第一三代となり中部長次郎（一九九九年～）が会長となっている。

村山佐太郎は都合三回も北水同窓会の会長を引き受けているが、村山は水産専門部第一回の卒業生で、卒業後も母校で教鞭をとり、水産専門部が函館に独立後は、教頭、校長として活躍し、新制大学になる際退職し、日米水産株式会社の社長に就任した人物で、その職歴からみても会長は当然と思われる。

北水同窓会の機関誌『親潮』は発刊以来、頁数の多少はあったが、大体年三回発行されてきた。一九四五年八月の敗戦後、一九四五年十月三日～四七年一月三日米軍に校舎を接収され、この間校舎は市内の東川小学校に移転していたため同窓会活動も思うにまかせず、『親潮』も一九四六年一〇八号・一回、一九四七年一〇九号・一回、一九四八年一一〇号一一一号・二回となり、以後一九五二年迄二回と続き、一九五三年から六五年迄年三回にもどっ

た。一九六六～七二年は年四回発行されたが、会員による会費納入率も三〇～三五％と悪く、出版費用、郵送料も高くなった事から再び三回にもどり今日に至っている。

北水同窓会の年会費も、当初は二円であったが、一九三五年三円に値上げされ、一九四一年には五円に値上げされた。当時は、納入者の氏名がその都度の『親潮』に掲載されていた。戦後のインフレ時代には、会費も値上げされ、一九五九年三〇〇円、一九六一年五〇〇円に、一九六六年一〇〇〇円、一九七七年には三〇〇〇円に値上げされ、しばらく続いたが、一九九九年にはついに四〇〇〇円に値上げされ今日に至っている。

北水同窓会による記念事業は、函館独立移転五周年を記念して、一九四〇年に祝賀会が開催された時、函館支部卒業生が学内の教職員四〇名を市内のホテルに招待して慰労会を開催したほか、『親潮』七四号が記念号として出版されている。これより先、一九三二年五月には創基二五周年を祝って、式典が挙行された。

一九五七年創基五〇周年記念行事は、祝賀会に引き続き物故者の慰霊祭、続いて卒業生の寄附金による水産資料館の上棟式が、各地から集まった卒業生の参加により執り行われ、竣工後学部に寄贈された。

一九五九年には、時の太洋漁業株式会社の中部謙吉社長より、「中部北洋研究館」建設、寄贈の申し出があり、一九五五年に目出度く竣工、学部に寄贈された。同窓会としては、中部社長に対する感謝の意を表すため、中部社長の胸像を製作、同施設内に建立した。『親潮』一四四号は、「中部北洋研究施設」の記念号として、特集号が出版されている。

一九八二年には、創基七五周年として、記念祝賀式典、記念植樹、同窓会による七五周年記念誌の出版のほか、同窓の寄附金による第二水産資料館が建設され、学部に寄贈された。更に『親潮』二一九号は同祝典号の特集号として出版されている。この時植えた木が今は立派に生長し、緑の学園にふさわしくはえ繁っている。

現在北水同窓会事務室が、この第二水産資料館の一部にあるが、一九九九年十月、展示品の古いフィルムから自

然発火して、火災になり、同窓会の事務室も消火の水のため、一部被害を受けたが、大事に至らず幸いであった。

一九九四年には創基八八年に当たるとして、祝賀会のみ市内のホテルで、地方からの卒業生も多数参加して行われた。

卒業生も年々多くなり、二〇〇〇年三月の時点で、正会員数一万一四八〇名、内物故者一九二一名、現在正会員数九五五九名の大世帯になっている。地方支部も最低でも各県に一つあり、北は稚内から、南は沖縄迄遠くはアメリカ、南米に迄あり、計五七を数えている。

毎年の練習航海でおしょろ丸、北星丸が日本の各地を訪れているが、各地で同窓の手厚い歓迎に合い、北水同窓会ならではと学生共々に深く感謝している。

北海道大学創基一二五年記念の後援会が結成されたが、卒業生が一万名以上の学部卒業生の理事は、一五名以上との事務局の通達により、水産学部も理学部、工学部、農学部とならんで一五名以上の理事を出す大世帯の部類に属している。

あとがき

『北大百二十五年史』の部局史をまとめるに当たり、その一〇〇年の歴史はすでに『北大百年史』に詳しく述べられていることから、できるだけその後の二五年史に重点を置くことにした。一本の大河にも似ていろいろな側面を見せながら間断なく流れる歴史を、機械的に区切ることによって生ずる誤解は避けなければならない。そこで一〇〇年史を短く紹介し、その流れの延長として二五年間の歴史を執筆するよう心がけた。

水産学部のこの二五年間の中で断行された学部と大学院の改組は、これからの歴史の中でかつての幾多の改革に劣らぬ大きな節目を示すことになるであろう。この改組を分かり易くするために三つの表を添付し、組織の統廃合や講座名、教官配置を示すことにした。大学院改組によってそれまで学部所属であった学科教官は大学院水産科学研究科に所属することになり、附属施設など学部所属教官と異なる組織体制をとることになった。また、特設専攻科入学が一九九六年に廃止されたことに伴う北星丸の二〇〇一年いっぱいでの減船、学科改組に伴う北洋水産研究施設の廃止、大学院改組による事務体制の組織替えなど、この二五年間は北大水産学部の大きな変換点となった。学部、大学院の改組に伴うこれら組織の歴史をこの二五年間を中心にまとめた。また、在学生、卒業生、教官の交流、学部運営への協力など極めて大きな貢献を続ける北水同窓会も部局史の記録にとどめなければならないだろう。

学部、大学院やその他の組織の改組の成果が問われるのはまさしくこれからである。一五〇年史あるいは二〇〇年史の部局史にどのような評価が下されるか、教職員は水産学部・水産科学研究科の将来の歴史を構築する大きな責任を負っている。

割り当てられた紙幅が限られており充分な部局史とならなかったことをお詫びする。ご寛恕いただきたい。

部局史編集は部局史編集委員の安間元（後に山口秀一）、小城春雄、中尾繁、西田清義、原彰彦、山羽悦郎、山本勝太郎があたり、その他、鈴木恒由、増田紀義、目黒敏美、大越金蔵、仲谷一宏、飯田浩二、久万健志、上田勲、松本禮一の各氏に原稿を寄せていただいた。

参考文献

大学院等整備構想検討委員会資料、北海道大学水産学部

『学生便覧』平成六年度、七年度、十一年度版、北海道大学水産学部

『北海道大学研究者総覧』北海道大学、一九九九年

『北海道大学水産学部広報』一七号（一九七七年）～四九号（一九九九年）

『北大水産学部七十五年史』北海道大学水産学部、一九八二年

「水産学部」『北大百年史』部局史、ぎょうせい、一九八〇年

『シラバス二〇〇〇』北海道大学大学院水産科学研究科、二〇〇〇年

『北水同窓会報』一号（一九二三年）～二七号（一九三四年）、北水同窓会

『親潮』二八号（一九三五年）～二七二号（二〇〇〇年）、北水同窓会

年表 ※一九七六年以前は『北大百年史』部局史を参照。

一九七七（昭52）
4・1 石田正巳学部長事務取扱となる
4・2 辻田時美・小林喜一郎・坂井稔名誉教授となる

一九七八（昭53）
4・2 石原義雄名誉教授となる

一九七九（昭54）
4・2 秋葉稔学部長となる
4・2 石田正巳名誉教授となる

一九八一（昭56）
3・25 実験棟竣工
4・2 西村雅吉名誉教授となる

一九八二（昭57）
10・1 創基七五周年記念式典挙行
12・8 サークル会館竣工

一九八三（昭58）
3・26 水産資料館別館竣工
4・2 辻野勇学部長となる
12・23 練習船おしょろ丸四世竣工

一九八五（昭60）
4・1 佐藤修学部長となる
4・2 川島利兵衛名誉教授となる

一九八六（昭61）
4・1 辻野勇・濱田啓吉・座間宏一名誉教授となる

一九八七（昭62）
3・27 プール竣工
4・1 正置富太郎・平岩節・三島清吉・藤井武治名誉教授となる
7・7 第二研究棟竣工

一九八九（昭64、平1）
4・1 木村喬久学部長となる

一九九〇（平2）
4・1 佐藤修名誉教授となる

一九九一（平3）
3・22 感染魚飼育室竣工
4・1 米田義昭学部長となる
4・1 富士昭・木村喬久名誉教授となる

一九九二（平4）
4・1 高木徹・前田辰昭・鈴木旭・山田壽郎名誉教授となる
9・28 研究調査船うしお丸二世竣工

一九九三（平5）
4・1 増田紀義名誉教授となる

一九九四（平6）
4・1 高橋裕哉名誉教授となる

一九九五（平7）
3・31 附属北洋水産研究施設が廃止された

4・1	山内晧平学部長となる
4・1	水産増殖学科、水産食品学科、水産化学科、漁業学科が水産海洋科学科、海洋生産システム学科、海洋生物生産科学科、海洋生物資源化学科に改組
5・19	創基八八周年記念式典挙行
一九九六（平8）	
4・1	箕田嵩・羽田野六男名誉教授となる
一九九七（平9）	
4・1	信濃晴雄・梶原昌弘名誉教授となる
一九九九（平11）	
4・1	繪面良男学部長となる
4・1	太田亨・山﨑文雄・島崎健二・大谷清隆名誉教授となる